

呼吸器内科

主 な 体 制

医師体制

副院長（呼吸器内科科長・部長）：吉見 誠至

診療技術部長（内科部長）：原田 孝

日本学会等認定資格

日本内科学会総合内科専門医	2	吉見 誠至・原田 孝
日本呼吸器学会呼吸器専門医・指導医	2	吉見 誠至・原田 孝
日本アレルギー学会アレルギー専門医	1	吉見 誠至

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

気管支喘息、COPD、間質性肺炎、肺癌、呼吸器感染症、睡眠時無呼吸症候群など様々な呼吸器疾患の外来・入院診療を行った。

入院患者数、疾患の内訳は例年とほぼ同様の傾向であった。細菌性肺炎が例年より多かった。高齢者の誤嚥性肺炎を診る機会が増えている。各科でCOVID-19を担当することとなり、当科でCOVID-19を担当する機会が増えた。高齢者が増えている影響で、理学療法士、言語聴覚士、ソーシャルワーカーなどコメディカルの関わりの重要性が増していると感じる。

当科での肺がん化学療法において、多職種を交えたカンサーボードを立ち上げた。

内科系の外来で撮影された胸部レントゲンのダブルチェックは今まで通り行った。

【2023年度実績】

HOT新規導入 40件

CPAP新規導入 23件

在宅NPPV新規導入 7件

禁煙外来 4人（成功率75%）

気管支内視鏡 26件

入院総数 445人（昨年度比 +11.2%）

内訳（DPC病名上位10疾患）：細菌性肺炎148人、肺がん（疑い含む）73人、

間質性肺炎50人、COPD 30人、誤嚥性肺炎28人、COVID-19 23人、膿胸13人、睡眠時無呼吸症候群 9人、気管支喘息 8人、気胸7人

■2024年度の目標・課題

- ・当科での入院・外来化学療法において、カンサーボードを充実させていく。
- ・超音波気管支内視鏡を導入する。
- ・高齢者が増えており、引き続き訪問看護など社会的な医療資源との連携を積極的にはかっていく。

内分泌内科

主 な 体 制

医師体制

科長（部長）： 荒木 修

日本学会等認定資格

日本臨床検査医学会 臨床検査専門医・評議員	1	荒木 修
日本内科学会 認定内科医	1	荒木 修
日本糖尿病学会 糖尿病専門医・研修指導医	1	荒木 修
日本糖尿病協会 療養指導医	1	荒木 修
日本内分泌学会 評議員	1	荒木 修
日本甲状腺学会 評議員	1	荒木 修
臨床研修指導医	1	荒木 修
緩和ケア研修修了	1	荒木 修
難病指定医	1	荒木 修
小児慢性特定疾病指定医	1	荒木 修

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

【診療内容】

外来

糖尿病内分泌外来9単位、甲状腺専門外来1単位、糖尿病初診外来4単位、フットケア外来1単位、糖尿病性腎症透析予防指導・糖尿病療養指導（随時）

検査

糖尿病・内分泌疾患に対する各種負荷試験

入院

糖尿病教育入院、血糖コントロール入院、内分泌精査入院（原発性アルドステロン症、下垂体疾患、副腎疾患など）、周術期・感染症・ステロイド治療・糖代謝異常妊婦周産期などにおける血糖管理（各科からのコンサルテーション）対応

【糖尿病チーム活動等】

- ・糖尿病療養チーム（Team Diabetes、2007年発足）
日本糖尿病療養指導士17人、群馬県糖尿病療養指導士24人
糖尿病教室の運営や企画、職員啓発、学会発表など
糖尿病チームミーティング月1回
透析予防指導カンファレンス隔月1回
- ・外来糖尿病教室（通常年間4回。今年度は開催を見合わせ、冊子の作成・配布）
- ・しののめ会（利根中央病院糖尿病友の会昭和63年創立）
総会・学習会（今年度は開催を見合わせ、紙上での年次報告）

糖尿病診療においては前年度同様、インスリンポンプ療法や 持続血糖測定器を使用した糖尿病治療、透析予防指導やフットケア外来の実施など、あらゆる治療困難な症例や重症合併症症例の治療に対応する体制を維持した。入院患者向けに1週間の糖尿病教室を前年同様、月2回のペースで開催した。院外からの紹介や健診後の初診患者対応に際しては、総合診療科と連携し診療した。

甲状腺疾患、原発性アルドステロン症、下垂体機能不全、ACTH単独欠損症、副腎不全、クッシング症候群などの内分泌疾患の診断治療や内分泌代謝緊急疾患である急性副腎不全、粘液水腫性昏睡、糖尿病性ケトアシドーシス、高血糖高浸透圧症候群などの診断治療にあたった。

多数の糖尿病患者を診療するため、非常勤医による外来や初診外来枠を複数設けることで対応にあたった。常勤医1名の体制のため緊急疾患や入院中の糖尿病合併周術期・周産期患者の血糖管理などに十分対応しきれない局面も多くあり、総合診療科・内科各専門科をはじめ各診療科に併診いただき診療を行なった。初期研修医、総合診療科及び内科専攻医各位に糖尿病内科での研修をしていただいた。

■2024年度の目標課題

内分泌・糖尿病領域において引き続き常勤医1人の体制であり、群馬大学からの外来支援を受け診療を行っている。患者数の増加に対する病診連携（紹介・逆紹介）の強化や、院内各科との診療連携（周術期・周産期・感染症・ステロイド治療時など）、内分泌・糖尿病領域の専門性の高い患者の入院受け入れ体制、糖尿病診療チームのスキルアップ等の課題に継続して取り組みたい。院内各診療科、栄養課、リハビリ科、薬剤部、診療支援部など各部署と連携し、入院治療から退院後の生活の場での安定した療養まで継続して行えるよう、引き続き質の高い糖尿病・内分泌診療を提供したい。このためにも初期ならび後期研修医の糖尿病内科研修を充実させ、スキルアップを図れるよう努めたい。コロナ禍で開催を見合わせていた外来糖尿病教室や患者会活動を再開したい。

消化器内科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）： 山田 俊哉
部 長： 深井 泰守

日本学会等認定資格

日本消化器病学会 消化器病専門医	2	山田 俊哉・深井 泰守
日本消化器病学会 消化器病指導医	1	山田 俊哉
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡専門医	2	山田 俊哉・深井 泰守
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡指導医	1	山田 俊哉
日本内科学会 総合内科専門医	1	山田 俊哉
日本内科学会 認定医	1	深井 泰守

活 動 報 告

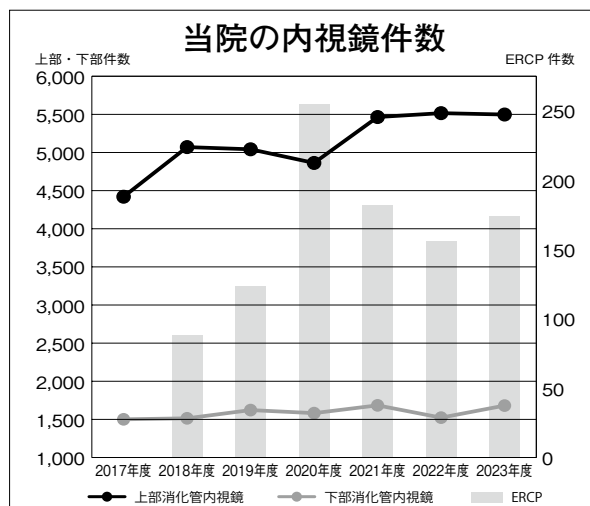
■2023年度のまとめ

消化器内科常勤医が減り、2人体制となったが、上部・下部消化器内視鏡検査については、例年通りの内視鏡室の稼働を行い、totalの件数は上部消化管内視鏡検査5498件、下部消化管内視鏡検査1681件であった。ERCPが必要な胆膵疾患も数多く当院に集まる状態で、ERCP 174件と数多く行っている。また、早期胃癌などに対するESD（内視鏡的

粘膜下層剥離術）も9件行った。深井先生がIBDの専門であり、IBDの診療も中心に行っており、生物学的製剤使用など高度医療も行っている。

■2024年度の課題

2024年度は消化器内科常勤が2名増員となり（1名は上半期・下半期で交代）、消化器内科4人体制となり、消化器疾患の診療幅が拡充されつつある。年々消化器疾患患者数や内視鏡検査・治療数が増加しており、総合診療科・他内科系Dr・外科Drと力を合わせて可能な限り地域に貢献できればと考えている。また、2024年度より、超音波内視鏡検査が導入され、今までは膵臓癌、消化管粘膜下腫瘍などの組織診断をするためのEUSFNA（超音波内視鏡下穿刺吸引術）は渋川・前橋方面へ紹介となっていたが、当院で行えるようになっており、今後、当地域での胆道・膵臓癌の早期発見などにも力を入れていければと考えている。また、当院は日本消化器内視鏡学会指導施設と日本消化器病学会認定施設であり、今後、若手Drへの指導にも力を入れていきたい。



循環器内科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）	：	近藤 誠
医 長	：	山口 実穂
医 員	：	野尻 翔
医 員	：	滝沢 大樹（外部研修中）

日本学会等認定資格

日本内科学会 総合内科専門医	1	近藤 誠
日本内科学会 内科専門医	1	山口 実穂
日本循環器学会 循環器専門医	2	近藤 誠・山口 実穂
日本循環器学会 循環器指導医	1	近藤 誠
日本心臓インターベンション治療学会 心臓カテーテル治療専門医	1	近藤 誠
臨床研修指導医	1	近藤 誠

活 動 報 告

■2023年度 診療概況

2019年4月より内科専門研修プログラム専攻医を受け入れ、2023年度末をもって3人目の専攻医がプログラムを終了した。2024年度から新たに1人の専攻医が加わり、現在鋭意研修中である。当院循環器内科では、スタッフの充実、実力強化に努め、今後の利根沼田地域での循環器診療の拡充を目指している。

人員強化に伴い、心肺運動負荷試験や心臓カテーテル検査のキャパシティが増え、必要に応じた専門的な検査、治療を積極的に進めている。

具体的な診療内容としては、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、心不全、弁膜症、不整脈、閉塞性動脈硬化症などの循環器疾患の診断と治療を、できるだけ地域内で完結することを目指し診療を行っている。特に心疾患の予後とQOL改善を目的とし、院内に多職種で構成する心臓リハビリテーション（心リハ）チームを結成し、入院中から外来に連続した心リハに取り組んでいる。また「心不全パnde

ミック」と言われるほど、心不全患者が増加している現状に対し、早期発見、早期介入を目指す、「心不全早期発見プロジェクト」を立ち上げ、地域の開業医や診療所、院内他科との連携を強化し、心不全診療に取り組んでいる。その他、がん治療の進歩に伴い問題になることが増えてきた、「がん治療関連心機能障害」と言われる、抗がん剤や、免疫チェックポイント阻害薬の使用に関連する心機能障害を早期に発見するため、院内の各診療科と連携する取り組みを始めた。また高齢心不全患者が増えるに従い問題となることの増えた「心不全終末期」に対する対応として、アドバンスケアプランニングの実施や心不全緩和ケアについての取り組みを行っている。

<診療実績>

2023 / 4 / 1 ~ 2024 / 3 / 31	
CAG(Coronary Angiography)	70件
PCI(Percutaneous Coronary Intervention)	46件
AMI	17件
UAP	4件
下肢PTA(Percutaneous Angioplasty)	6件
ペースメーカー植え込み術	15件
ペースメーカー交換術	6件
植え込み型心電計	5件
冠動脈CT	17件
CPX(心肺運動負荷試験)	209件
負荷エコー検査(運動/薬物)	14件(13件/1件)
心エコー GLS検査	12件
心臓リハビリテーション	入院 159件
	外来 159件

<体制の整備>

- 日本循環器学会研修関連施設認定
循環器専門医育成のため、施設認定を受けた。
- 血管撮影装置更新
血管撮影装置はCアームが多方向に動く機構を備え、全身の血管をスピーディーかつ安全に検査治療することが可能となった。
- 冠血流予備量比 (FFR: fractional flow reserve) に加え、Resting Full-Cycle Ratio (RFR) 導入
適正なPCIを行うため冠動脈狭窄病変前後の冠動脈内圧を測定し心筋虚血の有無を評価する。薬剤負荷が必要なFFRと、薬剤負荷が必要でないRFRを併用することで、より容易に心筋虚血の評価をすることが可能となった。
- 60MHz血管内超音波検査装置導入
60MHzの血管内超音波検査を導入したことにより、血管内の血栓やプラークをより詳細に観察することが可能となった。
- 冠動脈CT
80列CTを用いて外来検査として冠動脈CTを実施している。冠動脈CTでは、非侵襲的に冠動脈狭窄を評価でき、同時に血管壁の石灰化や動脈硬化プラークを観察することが可能である。
- CPX (心肺運動負荷試験)
心肺運動負荷試験を実施することで、慢性心不全や虚血性心疾患の患者が安全に活動可能な運動強度の閾値を判定することができ、日常生活における活動、行動制限を決定することができる。また、心臓リハビリテーションや自宅での運動療法を行う際の適切な運動強度を決定することができる。

• 心臓リハビリテーション

医師、看護師(病棟、外来)、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、管理栄養士、ソーシャルワーカー、医療事務の多職種で心臓リハビリテーションチームを構成し、慢性心不全、虚血性心疾患、閉塞性動脈硬化症、心臓大血管術後の患者に対して、心臓リハビリテーションを実施している。心臓リハビリテーションを行うことで、心疾患患者のQOL改善とともに、予後の改善が期待できる。

• 病棟エルゴメーター導入

心臓リハビリテーションを行う中で、患者の自主訓練を習慣づけるため、病棟での空き時間に理学療法士に処方された運動処方を実践するためのエルゴメーターを病棟内に設置した。

• 心不全早期発見プロジェクト「心不全ダイレクト検査」

心不全症状が出現する前の、心不全ステージA/Bの患者を早期に発見し、適切な早期介入を開始することで、利根沼田地域の心疾患患者の予後改善を目指している。「心不全ダイレクト検査」という指定の用紙を当院地域連携室にFAXすることで容易に紹介可能となる仕組みを導入した。

• 心臓超音波検査装置導入

心不全や弁膜症の病態、病状を評価するための安静時検査や運動負荷検査、またがん治療関連心機能障害を診断するためのGLS測定などを行うため、循環器専用の心臓超音波検査装置を導入した。

• 運動負荷心臓超音波検査用臥位エルゴメーター導入

運動負荷を行いながら心臓超音波検査を行うため、寝たまま漕ぐことのできるエルゴメーターを導入した。

• がん治療関連心筋障害早期発見対策

がん治療を行う院内各診療科と連携して、スムーズに患者さんの紹介、検査、診察ができるような体制の整備を行った。

• 心不全緩和ケア

病棟看護師を中心に心不全緩和ケアチームを発足させ、アドバンスケアプランニングの実施、多職種での意思決定支援の取り組みを通じて、心不全の終末期に対する介入を検討している。またチームで症例の振り返りや学習会などを行っている。

腎臓内科

主 な 体 制

医師体制

科 長（医 長）： 岡部 智史
医 員： 大塚 瑛公

日本学会等認定資格

日本内科学会 認定内科医	1	岡部 智史
日本内科学会 認定内科専門医	1	大塚 瑛公
日本腎臓学会 腎臓専門医	2	岡部 智史・大塚 瑛公
日本腎臓学会 腎臓指導医	1	岡部 智史
日本透析医学会 透析専門医	2	岡部 智史・大塚 瑛公
日本透析医学会 透析指導医	1	岡部 智史
臨床研修指導医	1	岡部 智史

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

腎臓内科は、2016年度より常勤一人体制であったが、2022年4月からは大塚医師が着任し、常勤二人体制となった。入院・外来では、急性腎障害・糖尿病性腎症をはじめとするネフローゼ症候群・維持透析導入・透析合併症など、様々な疾患の診療を行った。2019年12月からは新たに月水金午後クールを創設し、月水金3クール・火木土1クールの計4クールに維持透析枠を拡大し、2020年度には定期外来維持透析患者数を10人増加させることができた。また、エンドトキシン吸着療法や緊急透析などの、緊急の血液浄化療法もこれまでと同様に施行できた。そのほか、シャント閉塞ゼロを目標に、シャントPTAを精力的に行い、年間40件程度を施行した。

■2024年度の課題

2024年度については、これまでと同様に、維持透析を中心として、現行の診療体制を維持していきたいと思う。

総合診療科

主 な 体 制

医師体制

常勤スタッフ：	診療科長（部長）	鈴木 諭
	部長（高崎中央病院出向中）	比嘉 研
	診療副科長／科長代理（医長：医学教育）	宇敷 萌
	医長（前橋協立病院出向中）	中村 大輔
	医長（外来担当・医学教育）	石渡 彰
	医員（在宅医療プロジェクト・医学教育）	渡邊 健太
	医員（医学教育・緩和ケア）	書上 奏
	医員（北毛病院出向中）	周佐 峻佑
	医員	松原 侑紀
	診療看護師	安部 優子
	診療看護師	南川美由紀

非常勤スタッフ： 名誉院長（利根中央診療所所長） 大塚 隆幸

日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門研修プログラム：

専攻医	PGY 6 高橋 朋宏（高崎中央病院出向研修）
専攻医	PGY 6 保田 和奏（前橋協立病院出向研修）

日本専門医機構総合診療専門研修プログラム：

専攻医	PGY 5 岩出 良介（北毛病院出向研修）
専攻医	PGY 4 植野 貴也
専攻医	PGY 3 捧 博人

外部総合診療専門研修／総合内科連携プログラム：

専攻医	PGY 5 木村 彰仁（群馬大学総合診療専門研修プログラム）
専攻医	PGY 5 中川友香梨（耳原総合病院内科専門研修プログラム）
専攻医	PGY 5 池田 光穂（耳原総合病院内科専門研修プログラム）
専攻医	PGY 4 笠原 悠佑（栃木医療総合診療専門研修プログラム）
専攻医	PGY 4 山本 菜里（栃木医療総合診療専門研修プログラム）

日本学会等認定資格		
日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医	6	鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔、渡邊 健太、書上 奏
日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医	6	鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔、渡邊 健太、書上 奏
日本専門医機構総合診療専門医	6	比嘉 研、渡邊 健太、書上 奏、周佐 峻佑、高橋 朋宏、保田 和奏
総合診療専門研修プログラム指導医	5	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本内科学会認定総合内科専門医	1	鈴木 諭
日本病院総合診療医学会認定病院総合診療医	2	鈴木 諭、中村 大輔
日本病院総合診療医学会認定指導医	1	鈴木 諭
臨床研修指導医	5	大塚 隆幸、鈴木 諭、比嘉 研、宇敷 萌、中村 大輔
日本小児科学会小児科専門医	1	大塚 隆幸
日本小児神経学会小児神経専門医	1	大塚 隆幸
日本アレルギー学会専門医	1	大塚 隆幸
緩和ケアの基本教育に関する指導者研修会修了	1	鈴木 諭
日本医師会認定産業医	2	大塚 隆幸、比嘉 研
ICD 制度協議会認定 ICD	1	鈴木 諭
日本 DMAT 隊員	1	鈴木 諭（統括 DMAT）
医学博士	1	鈴木 諭

2023 年度総合診療科実績

【概要】

総合診療科は2023年度に新規開設後、丸10年の節目を迎えました。2014年4月の総合診療科開設当初は常勤医師2名の診療体制であった当科も、経年的にスタッフ及び専攻医数が増え、近年では関連病院へ指導医を出向支援に送り出せる状況となりつつあります。

利根中央病院において当科が担当している日常業務は、内科系救急外来・初診外来・予約外来・病棟管理・訪問診療等と多岐に渡っています。診療とともに教育は大切な日常業務の一つで、初期研修プログラムや総合診療／総合内科専門研修プログラムを中心とした研修医／専攻医教育は重要な位置付けです。専門各科も日常業務を行いながら研修医／専攻医教育を行ってはいますが、当科の教育の特徴としては①教育対象の研修医／専攻医数が多い、②医師としての基礎になる導入教育の多くを担当しているため教育に時間がかかる、③技術教育ではなく態度教育等も含むため学習者と教育者が時間を共にする必要性が高い、といった点で、一定の教育時間の確保が日常業務時間内に必要となります。

2023年度は、研修医教育の要の一人である中村大輔医師が前橋協立病院へ診療支援目的に出向するという教育体制の変化がある年でありました。教育体制が変化する中で、当総合診療専門研修プログラムに専攻医1年目として捧先生を迎え入れるとともに、栃木医療センター、群馬大学医学部附属病院、耳原総合病院から複数名の専攻医の受け入れを数ヶ月単位で行いました。教育体制が変化していく中でも、できる限りの教育力の強化と更なる体制整備が必要になると共に、利根中央病院だからこそ大切にしたい「中山間僻地の中規模総合病院における病院総合診療／家庭医療」のコア・コンピテンシーを整理し、後進に伝えていくことを大切にしたい年となりました。

2023年度からは、主には病棟診療体制を大きく変更を行いました。宇敷医師、石渡医師を各チームの指導医とし、診療看護師が指導医の診療補助的立場で病棟診療中心に関わるチーム診療の骨格を作りました。そして各指導医以下に専攻医を2～3名、更に各専攻医以下に研修医、student doctorを配

置する屋根瓦式病棟診療チーム体制を取り、病棟管理を行いました。主には指導医は基本的には直接の患者受け持ちを持たず教育・指導に力点を置く事で教育力の強化を計りました。また、2022年度から取り組み始めた利根中央診療所強化プロジェクトについても、病院から在宅までシームレスな診療体制作りを目的に渡邊医師に訪問診療を集約しました。

以上のように2023年度は利根中央病院総合診療科として大切にしていきたい理念を明確に整理し、それをスタッフ、専攻医、初期研修医や学生に共有すると共に、教育環境を整備するとともに、科内の体制含めて新たな世代に継承していく準備を始める初年度となりました。

【診療体制】

診療体制は、2022年度に外来・他科連携担当を主に担って頂いていた副科長の中村医師が前橋協立病院に出向することとなり、同任を石渡医師が引き継ぐこととなりました。部長の比嘉医師は2022年度に引き続き高崎中央病院の診療支援として出向継続となりました。専攻医を修了した渡邊医師、書上医師に引き続き当科スタッフとして関わってもらう事で、診療体制及び教育体制を維持しました。日本専門医機構の管理型総合診療専門研修プログラムには新たに外部初期研修プログラムを卒業した捧医師を専攻医として受け入れ、総勢専攻医5名（PGY 6が2名、PGY 5が1名、PGY 4が1名、PGY 3が1名）となりました。2022年度同様に総合診療Ⅰ、内科、小児科、救急科などの研修のため、数ヶ月単位で他科ないし他病院へ研修出向となる専攻医もあり、当科に所属し診療従事する管理型総合診療専門研修専攻医は常時2～3名となっています。また、上期には群馬大学総合診療専門研修プログラムからPGY 5の木村医師、栃木医療センター総合診療専門研修プログラムからPGY 4の笠原医師、大阪府耳原総合病院総合診療専門研修プログラムからPGY 5の中川医師を、下期には栃木医療センター総合診療専門研修プログラムからPGY 4の山本医師、大阪府耳原総合病院総合診療専門研修プログラムからPGY 5の池田医師が研修期限付きで当科所属となり通常診療のシフトに入られました。年度を

通じて院内に9名前後のスタッフ及び専攻医が常駐する体制を維持しました。

【外来部門】

総合診療科では主に予約外来と予約外・初診外来、発熱外来、二次検診・ワクチン外来（月曜日午前及び土曜日午前）を担当しています。2022年度に引き続き診療体制の整備として、従来の初診外来から分離独立した形で発熱外来を継続設置し、総合診療科が全日診察を担当を行いました。

予約外来

11,782名／年（90.9％ 対2022年度）

二次検診・ワクチン外来

1,274名／年（112.6％ 対2022年度）

予約外・初診外来（平日通常診療時間帯受診）

5,725名／年（147.4％ 対2022年度）

発熱外来 7,282名／年（62.5％ 対2022年度）

予約外来は主に医長以上のスタッフ医師7名で週10単位（1単位＝午前ないし午後半日）を開設しています。高血圧、脂質異常症、糖尿病等の一般的な慢性疾患管理に始まり、高齢者の多疾病罹患（multimorbidity）を背景とした多科併診患者の外来通院科調整や、多剤内服調整も行なっています。また、医学的問題だけではなく精神的社会的背景への対応なども行っています。一昨年度に引き続き、専攻医による退院後follow up外来の開設も行いました。

予約外・初診外来の総受診者数は、COVID-19のパンデミックに伴う疾患動向の変化や地域の方々自らの受診抑制等から2022年度はやや減少傾向ではありましたが、2023年度になり社会生活が通常に戻るようになる中で行路傷病者の受診も増加傾向となりました。地域の高齢化率の上昇を反映し個々の症例の重症度は高い傾向となっており、患者一人あたりの診療に要する時間が延長する傾向となりました。徒歩受診でも緊急性を有する疾患の方や重症者がいることから、外来混雑時や救急車重複要請時の対応を円滑にするために、2022年度に引き続き通常診療日においては、繁忙時に診療の補完をする目的でヘルプ医師を配置しました。発熱患者については、看護師による電話問診及びトリアージの後、

PPE（Personal Protective Equipment）装着の上、発熱外来での診療を行いました。発熱外来の年間受診患者数は、国の方針で自己検査キット判定が推進された事や感染症5類移行の影響もあり2022年度と比較し減少傾向となり7,282名となりましたが、引き続き地域における発熱患者の1次～2.5次診療を行いました。

更に今年度も、前年度に引き続き専攻医や研修医、医学生に対する教育を積極的に行ないました。二次医療圏内で唯一の総合病院機能を有する病院で、かつ群馬大学医学部の関連病院として、多くの専門外来を有する病院であるため、希少疾患や難病患者の状態悪化への対応も求められており、より幅広い疾患に対する知識と状態悪化時の適切な対応ができる医師を育てることを目標としています。そして学問としての医学的知識だけではなく、自身が対応する患者一人一人の心理・社会的背景を理解し配慮した医療（BPSモデル：Bio-Psycho-Social model）が提供できるように教育を続けました。

訪問診療に関しては、2023年4月より渡邊医師に患者集約を行い、利根中央診療所における訪問診療体制の変更を行うことで病院診療体制・教育体制の強化を行いました。2022年度から引き続き、渡邊医師を中心に訪問診療プロジェクトを推進しております。

【救急部門】

2023年度も2022年度に引き続き、平日日勤時間帯及び毎週土曜日午前において、救急搬送及び徒歩来院後院内トリアージで救急対応が必要と判断された内科系救急患者対応を、総合診療科医師中心にシフト制を取り診療を行いました。一部曜日の救急診療においては診療支援として専門各内科常勤医及び総合内科専門研修プログラムの専攻医にも対応を依頼しました。2023年度の救急外来受診者の総数は、2022年度よりも引き続き増加傾向となり、救急搬入件数及び救急応需率も2022年度に引き続き高率を維持しました。一方で救急要請件数の増加から、他患対応中や高度専門医療を必要とするとの判断から応需不能となった件数は、2022年度の約2倍101件と増加しました。

救急外来受診者総数

9,181名／年（103.8％ 対2022年度）

夜間休日患者数

6,204名／年（86.9％ 対2022年度）

救急搬入件数

2,825名／年（103.5％ 対2022年度）

内救急車2815名／年、ヘリコプター

10名／年

CPA 76名（ROSC 20名、

ROSC率 26.3％）

救急応需不能件数 101件（不応需率 3.5％）

2023年度も発熱患者の救急搬送においてはCOVID-19の可能性を考慮し、検査でCOVID-19が否定されない限りは全例PPE着用で発熱診療ブースでの対応を行いました。国の政策方針からCOVID-19専門病棟は年度途中で閉鎖されましたが、感染対策を継続し多くの発熱患者の救急受け入れを行うとともに、病棟閉鎖後も一般病床内でCOVID-19患者及び疑似症においても入院診療を行いました。

高齢化が進む利根沼田地域において高齢者救急の増加、CPA症例の増加は顕著となっています。利根沼田医療圏は東京23区と同等の医療圏面積であり、救急車両による搬送時間が長くなる傾向があり、重症救急対応やCPAのROSC率向上には病院前救急医療体制の整備と連携が必要です。2022年度と比較し、当院搬送症例の院内ROSC率はやや向上しましたが、今後も地域内外のEMS／HEMSとの連携が重要であると考えています。この間も沼田医療圏内で発生した3次救急医療機関対応が必要と判断された症例に関しては、前橋赤十字病院を基地病院とした群馬ドクターヘリに多大なる協力を得ています。沼田医療圏においてはJターン（基地病院に戻らず近隣医療機関に患者搬送を行う）割合が増加傾向にあり、2023年度は10件の群馬ドクターヘリ症例の搬入を受け入れると共に、搬送対象にならないまでも群馬ドクターヘリ要請されたヘリ連携症例も複数件応需対応を行いました。

【入院部門】

2023年度も2022年度同様に専門的治療が必要な症例は臓器別専門科が主治医として受け持ち、多

疾病罹患や疾病以外の社会的背景等が複雑かつ対応困難な症例については当科が入院主治医を受け持つ形を基本的にはとっています。より専門性の高い領域を臓器別専門科が主治医として入院対応するため、各臓器別専門科の周辺領域疾患に関しては該当科の状況に応じて当科が主治医として対応し、専門科からのアドバイスを受けながら入院診療を行いました。常勤医師が不在の疾患群に関しても外来各科専門医と連携した診療を行っており、結果として2023年度の当科担当入院患者の疾患内訳（ICD-10準拠）は多岐に及んでいます。

入院患者については2022年度と体制を変化させ、宇敷医師、石渡医師を各チームの指導医とし、診療看護師が指導医の診療補助的立場で病棟診療中心に関わるチーム診療の骨格を作りました。そして各指導医以下に専攻医を2～3名、更に各専攻医以下に研修医、student doctorを配置する屋根瓦式病棟診療チーム体制を取り、病棟管理を行いました。診療看護師は、各チームのメンバーの一人として診療に関わることで、入院患者を中心に早期医療対応が可能となっています。また、外来・救急・入院患者診療と多重業務となる医師の業務軽減に、診療看護師が病棟診療チームの一員として関わることで、医療安全にも寄与したと考えています。

総合診療科が担う業務は入院患者診療に留まらず、外来、救急、在宅診療に及ぶため、COVID-19流行状況等を考慮し受け持ち患者の制限を状況に応じて行いました。年度通じた総担当患者数は2022年度と比較し、やや減少しましたが、地域の高齢化が進んできている事等の影響から疾患複雑化が進み重症患者を担当する割合が増加傾向となっています。

入院患者数：989名／年（98.2％ 対2022年度）

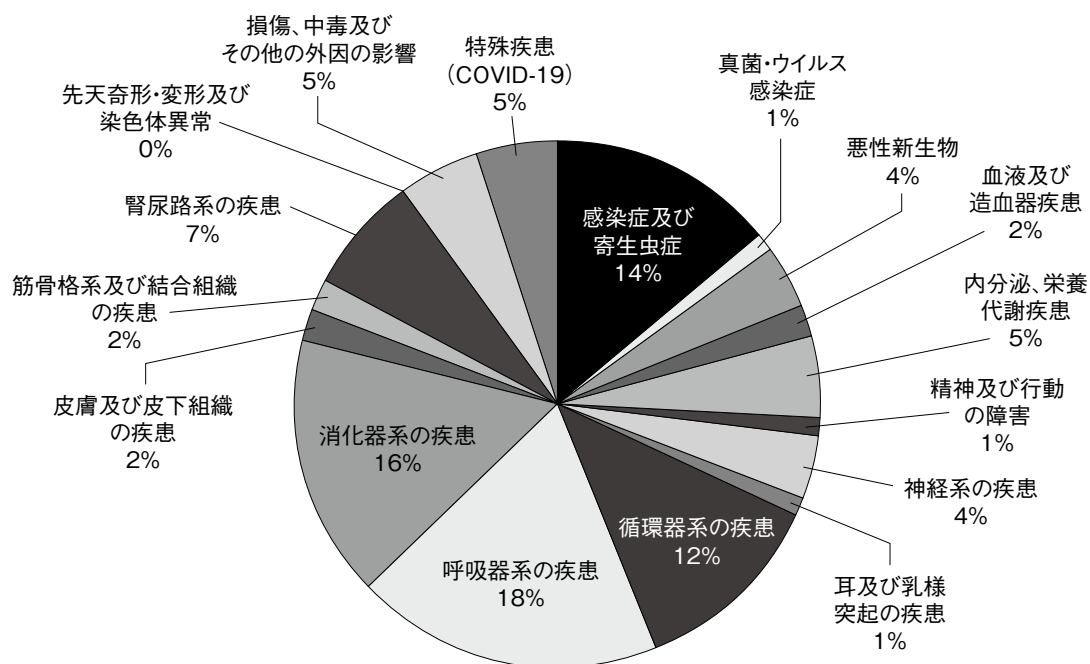
入院患者詳細：

偽膜性腸炎、細菌性腸炎、A群／G群連鎖球菌敗血症、MRSA敗血症、敗血症性ショック、顔面丹毒、カポジ水痘様発疹症、帯状疱疹性髄膜炎、三叉神経領域帯状疱疹、汎発性帯状疱疹、つつが虫病、レジオネラ肺炎、伝染性単核球症、サイトメガロウイルス性肝炎、食道癌、胃癌、S状結腸癌、下部胆管癌、

肝細胞癌、膵頭部癌、癌性胸膜炎、転移性骨腫瘍、びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫、骨髓異形成症候群、骨髓線維症、巨赤芽球性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、鉄欠乏性貧血、発熱性好中球減少症、家族性地中海熱、肥満低換気症候群、無痛性甲状腺炎、糖尿病性ケトアシドーシス、高血糖高浸透圧症候群、高アンモニア血症、薬剤性低血糖、低ナトリウム血症、高カリウム血症、低カリウム血症、急性アルコール中毒、アルコール性ケトアシドーシス、ウェルニッケ脳症、悪性症候群、過換気症候群、進行性核上性麻痺、パーキンソン病、ギラン・バレー症候群、癲癇複雑部分発作、ミトコンドリア脳症、症候性癲癇、一過性脳虚血発作、睡眠時無呼吸症候群、顔面神経麻痺、神経調節性失神、メニエール病、良性発作性頭位めまい症、前庭神経炎、高血圧緊急症、急性心筋梗塞、肺動脈血栓塞栓症、急性心膜炎、感染性心内膜炎、大動脈弁狭窄症、蘇生後脳症、心肺停止、心室頻拍、小脳出血、視床出血、心原性脳塞栓症、アテローム性血栓性脳梗塞、下肢閉塞性動脈硬化症、胸部大動脈瘤、腹部大動脈瘤、上腸間膜動脈解離、下肢深部静脈血栓症、急性喉頭蓋炎、急

性咽頭炎、扁桃周囲膿瘍、細菌性肺炎、誤嚥性肺炎、気管支喘息発作、膿胸、胸膜炎、急性呼吸促進症候群、人工呼吸器関連肺炎、特発性間質性肺炎急性増悪、自然気胸、縦隔気腫、マロリ・ワイス症候群、急性出血性胃潰瘍、出血性十二指腸潰瘍、腸管気腫症、腸間膜リンパ節炎、虚血性大腸炎、腸腰筋膿瘍、便秘症、大腸憩室炎、急性アルコール性肝炎、アルコール性肝硬変、肝膿瘍、胆石性急性胆嚢炎、アルコール性急性膵炎、総胆管結石、蜂巣炎、頸部リンパ節炎、褥瘡、褥瘡感染症、化膿性関節炎、偽痛風、頸椎偽痛風、多形浸出性紅斑、薬剤過敏性症候群、関節リウマチ、巨細胞動脈炎、顕微鏡的多発血管炎、リウマチ性多発筋痛症、RS3PE症候群、化膿性椎間板炎、横紋筋融解症、腎盂腎炎、腎前性腎不全、慢性腎不全、尿管結石症、精巣上体炎、出血性膀胱炎、尿路感染症、急性前立腺炎、子宮留膿腫、頭部打撲、外傷性くも膜下出血、胸椎圧迫骨折、大腿骨頭部骨折、一酸化炭素中毒、ベンゾジアゼピン中毒、アセトアミノフェン中毒、抗うつ薬中毒、低体温症、蜂刺症、

入院患者数の疾患別比率



熱中症、アナフィラキシーショック、COVID-19
【教育】

病院総合診療／家庭医療学の面白さを学生や研修医へ実臨床を通じて伝えることを当科の一つの役割と考えています。2023年度も引き続き研修医や専攻医の研修受け入れを行うとともに群馬大学医学部5～6年生の学外選択実習や見学学生の受け入れを積極的に行いました。COVID-19 pandemicによる影響で学外選択実習が一時中断されましたが、2022年と同様に実践的な教育を提供する様に心がけました。診療時間内に学生、研修医向けのカンファレンスやレクチャーを行い、on / off the jobのバランスを取っています。

学生実習受入：34名

（内群馬大学学外選択実習 13名）

初期研修受入：12名

morning lecture

利根中央病院では初期研修医や実習で来訪している医学生を主な対象としたmorning lectureを毎週火曜日ないし水曜日に定期的に行っています。専門各科の医師からのレクチャーもありますが、臨床研修を始めたばかりの研修医が日常で知っていた方がよい、臓器横断的な知識や社会資源等に関する知識を中心に、総合診療科スタッフ及び専攻医が依頼された内容に対してレクチャーを行っていますが、2023年度は担当回がありませんでした。

SDH / SDGs教育

2021年度から初期研修医と群馬大学学外選択実習で来院する学生を主な対象とした「SDH / SDGsを学び理解するためのカリキュラム」を策定し運用を開始しています。2023年度も引き続き初期研修医と群馬大学学外選択実習で来院する学生を対象にSDH / SDGs教育を行いました。

本カリキュラムは、1. 生活環境や労働を背景とした疾患との関係性を理解すること、2. 地域特性に起因する医療システムの課題を理解し解決策を考えること、3. 住民が健康かつ豊かに生活できる持続可能な社会のあり方を考えること、の3点を主要な目的とし、最終的に患者の心理社会的背景を理解した診療を行うことの意義を学び日常診療におい

て実践できることを目標としています。院内における理論学習を総合診療科スタッフ及び専攻医が担当したのちに医療圏内の各地域に出向き一週間の宿泊型生活体験研修を行っています。

<理論学習テーマ一覧>

・「BPS (Bio-Psycho-Social) モデル」

渡邊 健太

・「SDH / SDGs」

宇敷 萌

<宿泊型生活体験研修先>

・川場村富士山集落、一般社団法人WASAWASA
関連施設

・かたしな高原スキー場関連施設

外部講師招聘型教育

院内のスタッフだけではなく、外部講師を招聘した形で、主には医学生及び若手医師教育目的の総合診療／家庭医療領域に関するレクチャーや学習企画を、2023年度も主催ないし共催しました。COVID-19 pandemicの影響から、2023年度も引き続き現地集合型企画ではなくオンラインを利用した学習企画として開催をしています。

<院内レクチャー>

1) 感染症カンファレンス

埼玉医科大学総合医療センター 三村 一行医師

2) 胸部画像カンファレンス

立川総合病院 氏田万寿夫医師

3) 救急レクチャー

筑波記念病院 阿部 智一医師 計12回

4) 集中治療レクチャー

国保旭中央病院 坂本 壮医師 計3回

<学習企画>

1) 総合診療スキルアップセミナー 2023年7月
15日

「女性診療のポイント」

淀川キリスト教病院 産婦人科 柴田 綾子医師

「救急外来におけるコミュニケーション」

東京ベイ・浦安市川医療センター

救急部 船越 拓医師

2) 闘魂外来&闘魂祭 2023年11月4日

群馬沖縄臨床研修センター 徳田 安春医師
 国立病院機構栃木医療センター 矢吹 拓医師
 国立病院機構大阪医療センター 松本 謙太郎医師

初期研修医教育：担当 飯島 研史（北毛病院）、
 比嘉 研、宇敷 萌

初期研修医の集合研修として北毛病院から飯島研史医師に来訪いただき、月に1回の「レジデント・デイ」(学習企画とふりかえり)を継続開催しました。業務保証を行い時間内にレジデント・デイを定期的に行うことで、初期研修医自身が各々の研修内容を自身の成長に落とし込めるような形をとっています。レジデント・デイの学習テーマは、研修医に学んでもらいたい内容を含めて決定し、指導医がファシリテートをする形で行っています。

<初期レジデント・デイ学習テーマ一覧>

- ・第1回：2023年4月「プレゼンテーション」
- ・第2回：2023年5月「ショートプレゼン」
- ・第3回：2023年6月
「研修医のためのキャリア論」
- ・第4回：2023年7月「Modified Mini-CEX」
- ・第5回：2023年8月「Whole Person Careと医療者のWell-Being」
- ・第6回：2023年9月「医師のプロフェッショナルリズムについて考える」
- ・第7回：2023年10月
「フィードバックと5micro skills ～後輩指導を楽しもう！～」
- ・第8回：2023年11月「シャベリカ」
- ・第9回：2023年12月
「病院サバイバル術2023 ～コミュニケーション力はファシリテーション力？～」
- ・第10回：2024年1月「性的マイノリティ」
- ・第11回：2024年2月「Modified Mini-CEX」
- ・第12回：2024年3月「リーダーシップ」

専攻医教育：担当 群馬家庭医療学センター指導医一同

群馬家庭医療学センター（G-CHAN）の総合診療専門研修プログラムとして、2022年度に引き続

き、初期研修医と同様にG-CHAN所属の専攻医を対象とした月に1回の集合教育「G-CHANレジデント・デイ」を継続して開催しました。2023年度は2022年度に引き続きG-CHAN所属の専攻医数が増加していることもあり、レジデント・デイについては各々の「ふりかえり」を小グループに分かれて行う時間を優先的に確保し、基本的に学習企画は外部講師を招聘し行っていた形を取りました。

<G-CHANレジデント・デイ学習テーマ一覧>

- ・4月「オリエンテーション」
群馬家庭医療学センター 飯島 研史
- ・6月「Difficult Patient Encounter」
群馬家庭医療学センター 鈴木 諭
- ・7月「皮疹のみかた」群馬大学医学部附属病院
木村 彰仁医師
- ・9月「プロフェッショナリズム」
群馬家庭医療学センター 飯島 研史
- ・10月「アドバンス・ケア・プランニング」
群馬家庭医療学センター 渡邊 健太
- ・11月「ケアの移行」
群馬家庭医療学センター 宇敷 萌
- ・12月「日常診療におけるEBMの実践」
群馬家庭医療学センター 高柳 亮
- ・1月「緩和ケア」
群馬家庭医療学センター 井上 有沙
- ・2月「家庭医のキャリア」
群馬家庭医療学センター 飯島 研史
- ・3月「医療者自身のケア」
群馬家庭医療学センター 中村 大輔

【その他活動等】

学会活動：

- ・内科学会専門医部会診断プロセスワーキンググループメンバー 鈴木 諭
- ・病院総合診療医学会良質な診断ワーキンググループメンバー 鈴木 諭

学会演題発表等（演者）：

- ・第120回日本内科学会学術大会（2023. 4）
「日常診療の診断プロセスを考える講演会」
鈴木 諭

- ・第55回日本医学教育学会大会（2023. 7）
「農村地域におけるSDH・SDGsを学ぶカリキュラムの実践報告」

宇敷 萌、飯島 研史、鈴木 諭、渡邊 健太

- ・第688回日本内科学会関東地方会（2023. 7）
「Dolosigranulum pigrumによる敗血症性ショックを来し、死亡した1例」
箱田 祥子、石渡 彰、島田 諒、山口 実穂、鈴木 諭、近藤 誠

- ・第29回日本災害医学会総会学術集会（2024. 2）
「災害拠点病院におけるランサムウェア等によるサイバーインシデント発生時の初動を考える」
鈴木 諭

- ・第29回日本災害医学会総会学術集会（2024. 2）
「群馬県全県一斉EMIS入力演習結果から見える教訓と課題」
鈴木 諭

- ・第12回日本プライマリ・ケア連合学会関東甲信越ブロック地方会（2024. 3）
「髄液所見正常でも髄膜炎？ー発熱・頭痛を合併した帯状疱疹の一例」
保田 和奏

- ・第12回日本プライマリ・ケア連合学会関東甲信越ブロック地方会（2024. 3）
「刺し口がないツツガムシ病でも早期に治療できた一例」
植野 貴也

講演・学校保健活動等：

＜学校保健活動＞

- ・群馬県立尾瀬高校：全校生徒・教職員対象 「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田西中学校：中学校3年生対象 「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 笠原 悠佑
- ・川場村立川場中学校：中学校3年生対象 「がん教育」 鈴木 諭
- ・沼田女子高等学校：高校1年生対象 「性教育（性自認／性同意／性感染症）」 鈴木 諭

- ・片品村立片品中学校：中学校3年生対象 「がん教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立利根小学校：小学校4～6年生対象 「メディア教育」 宇敷 萌
- ・昭和村立大河原小学校：小学校5～6年生対象 「メディア教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立薄根小学校：小学校1～3年生対象 「がん教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立利南東小学校：小学校5～6年生対象 「命の大切さ」 鈴木 諭
- ・沼田市立川田小学校：小学校4～6年生対象 「睡眠の大切さ・メディアとの向き合い方」 高橋 朋宏
- ・みなかみ町立古馬牧小学校：小学校6年生対象 「薬物乱用防止教室」 渡邊 健太
- ・沼田市立沼田南中学校：中学3年生対象 「がん教育」 鈴木 諭
- ・片品村立片品小学校：小学校4～6年生対象 「睡眠の大切さ・メディア教育」 鈴木 諭
- ・みなかみ町立古馬牧小学校：小学校5～6年生対象 「性教育」 鈴木 諭
- ・沼田市立沼田南中学校：中学3年生対象 「性教育」 山本 栞里
- ・沼田市立沼田東小学校：小学校6年生対象 「薬物乱用防止教室」 鈴木 諭

小児科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）	：	西村 秀子
医 長	：	高橋 駿
医 員	：	江田 陽一

日本学会等認定資格

日本専門医機構認定 小児科専門医	1	高橋 駿
臨床研修指導医	1	西村 秀子

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- ・外来診療 患者数は平均54.7人／日。

一般外来：新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類感染症に移行したのに伴い、外来の受診方法を変更し対応した。新型コロナウイルス感染症以外にもインフルエンザウイルス感染症、RSウイルス感染症、プール熱、溶連菌感染症、手足口病など多くの感染症が流行し混雑する日も多かった。専門外来：内分泌外来、神経外来、消化器外来、心外来、腎外来などの専門外来を開設。学校検診により受診を勧められた肥満症、心電図異常、尿検査異常などの児の精査及び治療介入を行った。特に肥満症で受診する患者が増加した。

負荷試験：2023年度は食物負荷試験を12人に施行（卵 4人、牛乳・乳製品 2人、ソバ 2人、クルミ 2人、小麦 1人、ピーナッツ 1人）。内分泌負荷試験を3人に施行（LHRH負荷、アルギニン負荷、アルギニン・CRH負荷）。

- ・入院診療 一般小児科 203人、新生児 63人
一般小児科：入院患者数は前年度に比べ約1割増加した。肺炎・気管支炎・喘息様気管支炎（64人）、喉頭炎（10人）など呼吸器感染症が約1／3を占めていた。特にRSウイルス感染症（31人）によるものが多かった。気管支喘息発作（23人）、尿路感

染症（3人）、痙攣発作（15人）は前年度とほぼ同数であった。川崎病（8人）は前年度の約2倍であった。新型コロナウイルス感染症の入院は6人で、前年度に比べ減少した。溶連菌感染症の入院患者数が増加した（19人）。溶連菌感染症の患者総数が増加したこともあるが、扁桃周囲膿瘍や肺炎を呈したり、内服治療で改善が不十分のため、入院治療を必要とする重症度の高い症例が多かったことが要因と思われた。三次医療機関への転院搬送を行った患者は2人だった（乳児期早期の川崎病、再生不良性貧血）。

新生児：新生児の入院数は前年度の6割に減少した。低出生体重児（13人）呼吸障害（13人）、低血糖（11人）、黄疸（11人）、初期嘔吐（7人）によるものがほとんどであった。呼吸管理を要した患者は4人（全例がN-DPAP：呼吸気交換式経鼻持続要圧呼吸法）だった。入院患者数に比べ三次医療機関への転院搬送となる例が多かった（計5人、重症仮死2人、アシドーシス、大動脈縮窄症、ヒルシュスプルング病）。

■2024年度の課題

- 紙カルテでは肺炎・気管支炎、気管支喘息発作、胃腸炎の3種類のクリニカルパスを運用していた。電子カルテに移行後はまだ運用できていないため、看護師などと協力し導入していきたい。黄疸での光線療法、食物アレルギーによるアナフィラキシー後の経過観察入院などでの運用開始を考えている。
- 文部科学省の全国調査で、肥満傾向の子供の割合が多くの学年で過去最高となっていた。新型コロナウイルス感染症の影響により運動量の減少などが要因とされている。そのため肥満症で受診する患者が増加した。看護師、栄養士、リハビリ、検査など他職種と連携し、よりよい介入ができるように対応していきたい。

外科

主 な 体 制

医師体制

院 長	： 関原 正夫
診療部長・外科部長・外科科長	： 郡 隆之
外科部長・外科副科長	： 小林 克巳
外科医長	： 熊倉 裕二
外科医長	： 浦部 貴史（外科研修）
外科医長	： 鹿野 颯太
医 員	： 岩崎 竜也

日本学会等認定資格			
日本外科学会 外科専門医	5	関原 正夫・郡 隆之・小林 克巳・熊倉裕二・鹿野 颯太	
日本外科学会 外科認定医	1	小林 克巳	
日本外科学会 外科指導医	2	郡 隆之・小林 克巳	
日本専門医機構 認定外科専門医	1	岩崎 竜也	
日本がん治療認定医機構 がん治療認定医	3	関原 正夫・郡 隆之・小林 克巳	
日本呼吸器外科学会 呼吸器外科専門医	1	郡 隆之	
日本呼吸器内視鏡学会 気管支鏡専門医・指導医	1	郡 隆之	
日本消化器外科学会 専門医	2	小林 克巳・熊倉 裕二	
日本消化器外科学会 認定医	1	関原 正夫	
日本消化器外科学会 指導医	1	小林 克巳	
日本消化器外科学会 消化器がん外科治療認定医	2	小林 克巳・熊倉 裕二	
日本消化器内視鏡学会 消化器内視鏡専門医	1	小林 克巳	
日本食道学会 食道科認定医	1	熊倉 裕二	
日本登山医学会 国際山岳医	1	鹿野 颯太	
日本腹部救急医学会 認定医	1	小林 克巳	
日本臨床栄養代謝学会 認定医	2	郡 隆之・小林 克巳	
日本臨床栄養代謝学会 指導医	1	郡 隆之	
肺がん CT 検診認定機構 認定医	1	郡 隆之	
日本 DMAT 隊員	2	関原 正夫（総括 DMAT）・鹿野 颯太	
臨床研修指導医	3	郡 隆之・小林 克巳・熊倉 裕二	

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

2023年はCOVID-19の感染収束で通常の生活が戻り始めたが、まだ医療現場は移行期間であった。COVID-19パンデミックを発端とした救急医療崩壊による2次医療圏内外からの救急疾患の受け入れ要請の増加は変わらず、昼夜を問わず救急対応に忙殺された1年間であった。スタッフの疲弊も限界であったため、大学医局より2024年度に1名増員となった。当科で対応した主な疾患は、悪性腫瘍（肺癌、乳腺、胃癌、大腸癌）の手術・抗がん剤治療・緩和医療、急性疾患、外傷であった。利根沼田地区

の耳鼻科・皮膚科常勤医師不在に伴う入院患者の受け入れを引き続き行った。院内全般の整備としては、小林克巳医師によるNST体制の強化、熊倉裕二医師によるPICC挿入・CVポート造設体制の強化が行われた。浦部貴史医師のがん研有明病院での呼吸器外科国内留学が2年目を迎えた。鹿野颯太医師の2024年度の肛門疾患国内留学が決定した。

手術症例数

(2023. 1. 1～12.31)

疾患名	症例数	悪性	疾患名	症例数	悪性
食道腫瘍	2	2	イレウス	14	0
胃十二指腸潰瘍	2	0	虫垂炎	34	0
胃腫瘍	15	14	痔核、痔瘻	6	0
胆石症・胆嚢炎	69	0	ヘルニア	91	0
胆道腫瘍	1	0	乳腺	13	12
肝	1	0	甲状腺	0	0
脾	1	1	肺・縦隔・胸腔	25	12
大腸腫瘍	51	49	小児外科	0	0
その他大・小腸疾患	40	0	その他	84	1
			計	449	91

■2024年度の目標・課題

全領域における医療の質の向上。早期回復早期退院の促進。外科救急医療体制の強化。

小林克巳医師による院内のNST体制の強化。

熊倉裕二医師による上部消化管領域の拡充・質の向上。院内のPICC挿入・CVポート造設体制の強化。外科教育体制の整備。

星野万里江医師による下部消化管領域の拡充・質の向上。

浦部貴史医師のがん研有明病院での2年間の国内留学復帰に伴う呼吸器外科領域の拡充。

脳神経外科

主 な 体 制

医師体制

副院長（脳神経外科科長・部長）： 河内 英行
医 員（部 長）： 長岐 智仁

日本学会等認定資格

日本脳神経外科学会 認定専門医	2	河内 英行・長岐 智仁
日本静脈経腸栄養学会 認定医	1	河内 英行
NST 医師	1	河内 英行
日本 DMAT 隊員	1	河内 英行
臨床研修指導医	2	河内 英行・長岐 智仁

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

2023年4月より群馬大学医学部附属病院脳神経外科より、長岐智仁先生が着任し、常勤医二名体制が復活した。また、群馬大学医学部附属病院との連携により、脳梗塞における超急性期血栓溶解療法から、drip & shipによる血栓回収療法につながるホットラインも確立でき、利根沼田地域からも脳卒中超急性期治療が行える体制ができた。

また、片頭痛対策として、片頭痛予防外来を設け、患者様からは好評を得ている。両側眼瞼けいれん・片側顔面けいれん・四肢の拘縮に対するボツリヌス外来も行っている。

■2024年度の目標・課題

一般診療、救急診療のみならず脳卒中予防などの啓発活動を行っていきたい。

整形外科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）	：	須藤 執道
副 科 長（部 長）	：	細川 高史
医 長	：	長島 泰斗
医 員	：	川上 詩織
医 員	：	岡田 和也

日本学会等認定資格

日本専門医機構認定整形外科専門医	2	須藤 執道・細川 高史
日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医	1	須藤 執道
日本手外科学会認定専門医	1	細川 高史

活 動 報 告

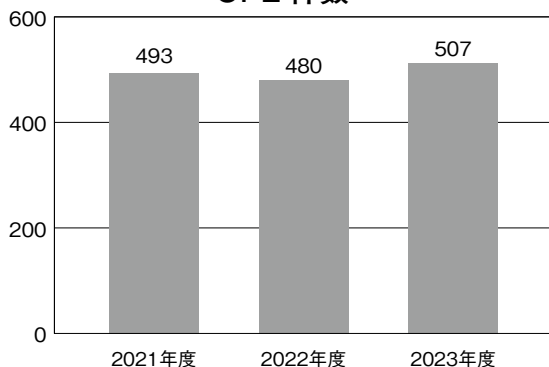
■2023年度のまとめ

- 2023年度も骨折などの外傷を中心に幅広い対応を行った。
- 当院には手外科の専門医が在籍しており、上肢（手・肘・肩）の外傷や変性疾患に対する治療に力を入れている。
- 2023年度からは手関節の関節鏡を導入し、鏡視下での手術も行っている。

■2024年度の目標・課題

- 2024年度も引き続き変形性関節症を代表とする変性疾患に対する治療と、高齢者の骨折の原因である骨粗鬆症に対する予防的治療を医師会の先生方と協調して行っていきたい。
- 手関節鏡を用いた鏡視下での手術を積極的に行っていきたいと考えている。

OPE 件数



産婦人科

主 な 体 制

医師体制

名誉院長（産婦人科部長）	：	糸賀 俊一
科 長（医 長）	：	鈴木 陽介
部 長	：	古川佳容子（10月より）
部 長	：	小松 央憲
医 長	：	西出 麻美
医 長	：	橋本 啓（10月より）
医 員	：	鹿野奈津美

日本学会等認定資格

日本産婦人科学会専門医	3	糸賀 俊一・鈴木 陽介・西出 麻美
日本産婦人科学会指導医	1	糸賀 俊一
臨床研修指導医	3	糸賀 俊一・鈴木 陽介・西出 麻美

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

利根中央病院産婦人科は、群馬県北部の中核病院として、①産婦人科全般の診療、②分娩取り扱い、③婦人科救急受け入れ体制の維持を目標としている。2023年度は腹腔鏡・子宮鏡手術の経験豊富な小松央憲医師がチームに加わり、腔から内視鏡や鉗子を挿入する手術（経腔的内視鏡手術：vNOTES）や、メッシュを使用した骨盤底再建術（腹腔鏡下仙骨腔固定術：LSC）を導入した。

若年女性人口の急速な縮小を受け、2023年度の分娩数は331件と、これまでの400件台から大幅に減少した。診療圏が利根沼田・吾妻・渋川の3地域にまたがっており、遠方からの通院の負担をなるべく少なくするよう、各地域の診療所・病院と連携を深めている。がんに対しては、群馬大学産科婦人科との連携のもと、診断、治療、看取りまで幅広く対応した。引き続き初期臨床研修医の教育の他、医学生の実習も広く受け入れた。

■2024年度の目標・課題

2024年4月から、直前まで厚生労働省で予防接種行政に携わっていた浦部夢子医師が着任した。専門的な知見を活かし、院内外での啓発活動を進めている。また、群馬大学に加え、帝京大学との人員交流がはじまり、より、地域で提供できる医療の選択肢を増やすように努めている。

■診療実績（2023年度）

分娩数 331件（うち帝王切開75件）
手術数 274件
（うち腹腔鏡手術64件、子宮鏡手術19件）

麻酔科

主 な 体 制

医師体制

常勤麻酔科医師	:	1人
麻酔科部長・手術室室長	:	井手 政信
非常勤麻酔科医（総数）	:	6人

日本学会等認定資格

日本麻酔科学会麻酔科標榜医	1	井手 政信
日本麻酔科学会麻酔科専門医	1	井手 政信
日本麻酔科学会麻酔科指導医	1	井手 政信
日本医師会認定産業医	1	井手 政信

活 動 報 告

■2023年度まとめ

- 麻酔科では手術部・外来（術前診察・ペインクリニック）での診察を行っており、麻酔科管理症例は934件、麻酔法は全身麻酔が約7割で、その他は区域麻酔管理が主となっている。
- 患者の高齢化・緊急搬送対応など、合併症を有する重症患者割合は増加傾向である。
- 各週1日（木）のペインクリニック外来では、帯状疱疹後神経痛・筋骨格系疼痛管理が主となっており、薬物療法や低侵襲ブロックで対応している。
- 手術患者の高齢化に伴い合併症を有する患者が増え、周術期管理の必要・重要性がより増している。

■2024年度の目標・課題

- 非常勤麻酔科医師で周術期麻酔管理の安全確保を手術室スタッフと協力し、徹底したものとする。
- 外科各科・co-medicalとの連携を深めて、周術期の安全かつ効率的運用を図る。
- 手術室看護師との患者情報共有と確認を徹底する。
- 患者サービスにより寄与するべく、個々スタッフの心身健やかに務めることに留意する。

眼科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）： 高橋 宙

日本学会等認定資格			
日本眼科学会 眼科専門医	1	高橋 宙	
難病指定医	1	高橋 宙	

活 動 報 告

■2023年度まとめ

手術件数を以下に示す。

水晶体再建術	370眼
(うち眼内レンズ縫着術 1 眼)	
結膜下眼窩脂肪ヘルニア切除術	1眼
翼状片手術	4眼
眼瞼皮膚弛緩切除	2眼

■2024年度の目標・課題

近医眼科クリニックの閉院に伴い紹介患者数が増加している。特に加齢黄斑変性に対する硝子体注射の件数が急増している。患者負担の軽減と安全性を確保しつつ効率化に努めていく。

回復期リハビリテーション科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）： 安藤 哲

日本学会等認定資格

日本ドック学会 人間ドック健診認定医	1	安藤 哲
日本医師会 認定産業医	1	安藤 哲
臨床研修指導医	1	安藤 哲

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

回復期リハビリテーション病棟では、年間延べ患者数は12045人。運動器リハビリ：73.7%、脳血管リハビリ：17.8%、廃用症候群リハビリ：8.5%の割合です。年間平均稼働率：99.7%、重症患者割合：46.42%、在宅復帰率：84.58%。紹介患者比率：4.23%であった。

■2024年度の目標・課題

- 脳血管リハビリの患者獲得。
- 他院からの患者受け入れを促進する。
- 病棟内業務の充実、効率化、標準化を進める。

放射線科

主 な 体 制

医師体制

科長（医長）： 山田 宏明

日本学会等認定資格

日本医学放射線学会 放射線診断専門医	1	山田 宏明
日本医学放射線学会 放射線科研修指導者	1	山田 宏明
臨床研修指導医	1	山田 宏明

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- 当院では救急医療に今まで以上に力を入れており、渋川・吾妻など利根沼田地域以外の救急患者も増加している。重症者も多くCT・MRIといった画像検査も増加している。また癌治療や術後経過観察目的の検査も多く、造影剤を使用した検査が特に増加している。
- 造影検査増加に伴いアレルギーも一定の頻度で生じているが、複数の部署で合同シミュレーションを行い、迅速に対応できるように訓練している。基本的に放射線科医師が初期対応を行い、治療適応を判断している。アレルギーリスクが高い患者については、可能な限り放射線科医師が検査に立ち会い迅速な対応が出来るようにしている。
- 前年度もCT・MRIを中心に地域の先生方より多くの検査ご依頼を頂いた。偶発的に癌など検査目的外の病変が発見されることがあり、読影レポートを通じて報告を行っている。
- 前年度より新技師長が就任し、新入職技師が2名加入した。当初は新人教育と通常の放射線科業務の両立に苦慮したが、現在は新人が力をつけ滞りなく業務を行っている。
- 放射線科内にて独自のヒヤリハット報告を行い、

毎月振り返りを行っている。撮影方法などについての勉強会も定期的に開催し、撮影技術の向上に努めている。

- 読影レポートの見逃しを防止するため、院内で対策を講じている。

■2023年度診療実績

	総件数	前年比
一般撮影	34,139	104%
CT検査	10,532	105%
MRI検査	3,172	101%
健診関連	8,327	101%
総検査数	52,861	104%

放射線科診断部門読影件数

	件数	前年比
CT検査	8,692	105%
MRI検査	2,465	105%

■2024年度目標

- 今年度複数の科で医師増員があり、今まで以上に放射線検査の増加と多様化が予想される。撮影技術、読影能力の向上に努め、より良い医療を提供できるよう努力していく。
- 救急患者増加のため、予定患者の検査をお待たせする機会が多くなっている。検査の迅速化、効率化が出来るよう一層努力していく。

病理診断科

主 な 体 制

医師体制

科 長（部 長）： 大野 順弘

日本学会等認定資格

日本病理学会認定病理専門医	1	大野 順弘
日本臨床細胞学会細胞診専門医	1	大野 順弘
臨床研修指導医	1	大野 順弘
死体解剖資格	1	大野 順弘
H.pylori 感染症認定医	1	大野 順弘

活 動 報 告

■2023年度活動報告

【体制の整備】

日本病理学会登録施設

日本臨床細胞学会認定施設

【CPC】

3/18に開催

【診療実績】

組織検査	2,616
迅速検査	22
免疫染色	1,431
細胞診	3,495
迅速細胞診	12
病理解剖	0

■2023年度のまとめ

【精度管理】

- ・日臨技臨床検査制度管理では病理組織検査は全問正解で評価A、細胞診検査では15問中1問不正解となり、正解率93%であった。
- ・群馬県臨床検査精度管理調査は評価対象外の設問以外は細胞診すべて評価Aであった。

- ・日本病理制度保証機構が主催する、免疫染色の評価ではすべて許容範囲であり、フォトサーベイに関する精度管理では、すべて適性の評価を得ることができた。

【業務改善】

- ・大腸内視鏡検体の増加に伴い病理医の負担が増えてしまったため、標本のデジタル化を行い報告書に添付することで、所見記載の簡素化を行った。
- ・CPCの病理医によるプレゼンテーションおよび報告書作成を群馬大学から派遣された医師に依頼した。

■2024年度の課題

- ・病理医の業務軽減のため、タスク・シフトをさらに進められるよう準備を整える。
- ・臨床医、がん診療委員会ともに、ゲノム医療に必要なコンパニオン診断のための検査に関わるマニュアルの作成。
- ・病理医の交代に向けてスムーズな対応ができるように準備する。

健診センター

主 な 体 制

医師体制

健診センター長	：	小沢 恵介
事務課長	：	中嶋 美保
保健師	：	4人
看護師	：	5人
准看護師	：	1人
事務員	：	7人

日本学会等認定資格		
人間ドックアドバイザー	2	山田 美香・樋口 雄大
日本人間ドック・予防医療学会認定医	1	小沢 恵介
健診マンモグラフィ読影認定医師	1	小沢 恵介
日本外科学会専門医	1	小沢 恵介
日本乳癌学会乳腺専門医	1	小沢 恵介
日本乳癌学会乳腺指導医	1	小沢 恵介
日本胸部外科学会胸部外科認定医	1	小沢 恵介

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

人間ドック数：2,560件（前年2,528件、101.3%）
事業所検診数：3,807件、前年比110.1%
協会健保健診：1,652件、前年比97.85%の受け入れを行った。

新型コロナウイルス感染症や体調不良による、健診・ドックの予約の変更などを柔軟に対応できるよう変更用の枠を増やし先延ばしにならないよう対応することができた。また、診断書検診も枠を増やし可能な限り受け入れを増やすことができた。

医師体制は昨年度同様で常勤医師1名と週3回と隔週の金曜日の非常勤医師による協力で昨年より多くの件数を追求した。

各市町村からドック後の特定保健指導の依頼が増加し対応を始めた。脳ドック希望も増加傾向であり、脳外科医師とも連携し対応ができた。

ストレスチェックは例年並みの対応を行った。

■2024年度の課題

常勤の医師体制は今後も医師獲得に向けて努力を行う。常勤保健師の産休により、特定保健指導への対応、各種資格取得への奨励・援助を行い、健診結果にもとづく指導対応が弱くなってしまうが、受検者様には迷惑のかからないよう内部調整を行う。各健診期間の駆け込み需要を緩和するため期間中の早めの受診を呼びかける。例年より、健診の申込が早く早々に午前の予約枠が埋まってしまっているため柔軟な予約対応をしていきたい。

脳外科医師協力のもと、脳ドックキャンペーンを行い、脳ドック集客を増やす取り組みを行う。

ドック・健診の件数増および保健指導を充実させ、地域住民の健康づくり・住みやすいまちづくり・安心して働ける職場づくりに貢献する。

皮膚科

主 な 体 制

医師体制

医 師（医 長）： 永井 弥生（非常勤）

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

【全体の動向】2023年度は前年度と同様に、週4回程度の非常勤医師による診療体制を保った。継続処置が必要な場合、緊急性のある場合や院内紹介などには適宜対応している。前年度同様、内科や外科の協力にて皮膚科疾患や褥瘡患者の入院にも対応できた。在宅や施設で発生した重度褥瘡に対する頻回のデブリドマンを要する方や血管障害に伴う潰瘍などが多く、他科と協力しつつ局所処置に対応している。

【手術等】手術室における手術は週2-3件程度、局所麻酔による良性皮膚腫瘍切除および皮膚癌や表皮肉腫に対して局所麻酔下の手術を行っている。陥入爪に対しては、痛みの除去を目的として、テーピングや薬物治療のほか、装具による矯正治療、フェノール法、ワイヤー法など、症状に応じた治療を選択している。

【褥瘡診療】在宅や施設等で繰り返しデブリドマンを必要とするような重症褥瘡が発生している。介護力などの社会的問題が背景にあり、早期に適切な対応が必要である。褥瘡ケアチームによるケアや現場での指導レベルが向上しており、問題となる場合に皮膚科医が診察を行う体制として、スムーズな診療が行えている。

【その他】皮膚科領域では近年、様々な疾患に対する新しい治療が進んでいる。難治性アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤、JAK阻害薬などの治療

は良好な結果を得ている。難治性の慢性蕁麻疹に対する皮下注射薬による治療、原発性腋窩多汗症に対する外用薬治療も適宜行っている。高齢者の肥厚が著しい足の爪白癬は、治癒は難しいが、QOLの改善を図るために爪切除等の処置を行っている。

■2024年度の課題

引き続き非常勤1名の体制にて週3-4日程度の診察日を保ち、緊急時には可能な限り対応していく予定である。他科と関連した疾患、社会的背景に伴って発生する病態などに対して、必要なスキルを提供することをメインとして皮膚科診療を提供していきたい。

泌尿器科

主 な 体 制

医師体制

科 長（医 長）	：	金子 裕生
医 師	：	野村 昌史（非常勤）
医 師	：	大塚 保宏（非常勤）
医 師	：	根井 翼（非常勤）

日本学会等認定資格

日本泌尿器科学会専門医	4	金子 裕生、非常勤泌尿器科医師 3 人
日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会泌尿器ロボット支援手術プロクター	1	金子 裕生

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

泌尿器科は、2016年度から非常勤医師のみの体制であったが、2022年7月から、常勤医師を含む体制へ拡大した。拡大後、外来は、週5日（月、火、水、木、金）となり、入院および手術に対応可能となった。開腹手術や鏡視下手術、ロボット支援手術が必要な場合には、他施設へ紹介している。

■2024年度の目標・課題

2024年度についても、同様の体制で診療を継続していく。また、泌尿器科領域の医療の進捗（診療ガイドラインの変更）に合わせて、必要な設備や器材を導入していく。

耳鼻咽喉科

主 な 体 制

医師体制

医 師（医 長）	：	松山 敏之（非常勤）
医 師	：	桑原 幹夫（非常勤）
医 師	：	櫻井みずき（非常勤）
医 師	：	内田 美帆（非常勤）
医 師	：	河本 堯之（非常勤）
医 師	：	松本 侑子（非常勤）

日本学会等認定資格

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会認定耳鼻咽喉科頭頸部外科専門医	4	松山 敏之・桑原 幹夫・櫻井みずき・内田 美帆
日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会認定耳鼻咽喉科頭頸部外科指導医	2	松山 敏之・桑原 幹夫
日本アレルギー学会認定アレルギー専門医	1	松山 敏之
難病指定医	2	松山 敏之・櫻井みずき
日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会補聴器相談医	1	桑原 幹夫

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

2023年度は月曜日から土曜日の午前中に耳鼻咽喉科診療を行った。

2023年度の耳鼻咽喉科総外来数 7,106人（月平均592人）

2023年度の入院数 37人

外来数、入院数、ともに前年度より増加している。

主な入院は耳鼻咽喉科領域の感染性急性炎症疾患が多く、続いて、めまい症、顔面神経麻痺、突発性難聴などとなっている。常勤医が不在のため、入院管理の協力を外科や総合診療部の医師にお願いしている。

県北毛地区の耳鼻咽喉科頭頸部外科診療の拠点となる地域中核病院として診療している。耳鼻咽喉科一般診療に加え、中耳炎などの日帰り手術、めまいの精密検査、好酸球性副鼻腔炎に対する生物学的製剤治療、アレルギー性鼻炎に対するアレルギー免疫療法などを特徴として治療している。また県北毛地区の頭頸部癌患者の通院先、終末期緩和ケア治療先

として機能している。

緊急性の高い症例、重症の症例、悪性疾患、手術症例、追加精査症例などは、群馬大学医学部附属病院や前橋赤十字病院をはじめとした病院に紹介している。

■2024年度の課題

常勤医不在のため、当院での精査加療には限度がある。県北毛地区の耳鼻咽喉科頭頸部外科診療の向上が大きな課題である。

連携協力医の諸先生におかれましては、平素より大変お世話になっております。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

（群馬大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 松山敏之）

精神神経科

主 な 体 制

医師体制

医 師（医 長）： 渡會 昭夫（非常勤）
医 師： 藤平 和吉（非常勤）

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

常勤医不在が長く続き、非常勤医師2名で週5日の外来診療体制を維持しながら、精神科デイケアの運営も併行して行ってきた。新規患者受け入れの原則休止が続き、地域の皆さま方には大変なご不便をおかけしている状況である。一方、高齢者で地域外の医療機関への受診が困難な場合や、身体疾患のため当院他科との共同治療が必要な場合などは、特例として可能な限り新規受け入れを行ってきた。

■2024年度の目標・課題

2024年度は12年ぶりに常勤医師の配置が可能となる予定である。既に月600名の再来かかりつけ患者が来院されるため、新規患者の大幅な受け入れは難しいものの、可能な限り対応する予定である。

また、総合病院精神科の役割として院内他科との連携（コンサルテーション・リエゾン精神医学）のより一層の充実や、がん患者への精神心理学的支援として院内緩和ケアチームへの参画も予定している。

さらに、院外の公的業務への支援（県や市区町村の健康保健相談、学校教育委員会への参加、裁判所・検察等への精神医学的知見の提供など）も「地域に根差した利根中央病院精神科」として引き続き積極的に行っていききたい。

看護部長室

主 な 体 制

看護師部長	：	布施 正子
副看護部長兼医療安全管理者	：	須田 良子
看護教育・学生対策担当師長	：	立木 歌織
感染管理認定看護師長	：	松井 奈美
看護師（育休中）	：	7人

日本学会等認定資格

認定看護管理者	2	布施 正子・立木 歌織
母性看護専門看護師	1	立木 歌織
感染管理認定看護師	1	松井 奈美
アドバンス助産師	1	立木 歌織
群馬県糖尿病療養指導士	1	須田 良子

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

新卒確保：16名 新人の退職率：0% 看護師の退職率：5.2%

2023年5月、新型コロナウイルス感染症が感染症法の5類に移行となり、2021年9月から陽性患者を受け入れる病棟として運営してきた5C病棟12床を4月末で閉鎖した。発熱外来も1日間から半日へと体制を縮小した。

また、これまではWeb開催が中心であった様々な研修会が、徐々にではあるが対面やハイブリッドでの開催となった。医療福祉生協連主催の福島や広島でのフィールドワークも再開し、看護協会、群馬民医連主催の管理者研修にも積極的に参加した。師長研修会では「看護政策」の見直しにとりかかり、主任会議では「キラリ看護」のブックレットの更新に向け論議を重ねた。

看護師の特定行為研修(在宅パッケージ)を終了した看護師により、在宅におけるPEG交換が実施された。また新たな特定行為を取得するための受講希望者も誕生し、今後は特定行為研修終了者の活躍の場や指示書の整備など総合的に検討していく必要がある。

看護部が中心となって推進している「似顔絵セラ

ピー」は、年間計画を立て年4回開催した。地元の高校生や組合員も交え、似顔絵セラピーの取り組みを広める活動に力を入れた。

■2024年度の目標・課題

看護部方針のテーマは「人生100年時代！働き方改革のイノベーションー安全なタスクシフト・シェアー、医療のDX化に向けた検討ー」である。2024年4月から「医師の働き方改革」がスタートする。医師から看護師へ、看護師から看護補助者へとタスクシフト・シェアーが促進されるなか、より安全に質の向上を目指す視点が重要となる。看護部では、教育委員会の役割に看護補助者教育担当を位置づけ、看護補助者とともに教育体制の充実に向けて検討を進めていく。また、「看護師の特定行為PJ」の役割も拡大し、育成のための環境整備や研修の進捗管理、活動状況などを検討していく場に位置づけた。

今後は少子化や人口減少が進むなかでITやIoTを駆使した業務効率の向上が必要とされる。発熱外来を中心に、Web問診を取り入れデジタルライゼーションを促進させる。今後は医療のDX化に向けた論議が加速されるため、検討を進める必要がある。

外来A（内科系外来）

主 な 体 制

副看護部長兼看護師長	：	菅家まなみ
主 任	：	関上 美紀
副 主 任	：	加藤 政文
看 護 師	：	24人
准看護師	：	6人
精神保健福祉士	：	1人
看護補助者	：	7人

日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士	2	関上 美紀・堀内小百合
群馬県糖尿病療養指導士	1	林 美知江
日本循環器学会心不全療養指導士	1	小林 智子
インターベンションエキスパートナース	1	原澤 知恵

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

内科系は内科・総合診療科・精神科・光学医療室を備えている。

今年5月にCOVID-19が感染症法の位置づけが5類感染症となったが、発熱患者受診は減ることなく引き続き多い。5類感染症移行後も十分な感染対策をとりながら発熱患者の診療にもあたっている。一般外来では専門医の増員に伴い、専門外来の受診人数が増加している。

看護外来では今年度心不全療養指導士が中心に心不全療養指導に積極的に取り組んできた。

光学医療室ではインターベンションエキスパートナースが誕生。循環器内科医師と協力し心臓カテテル検査、治療あたっている。さらに内視鏡検査治療のESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）など新しい治療も多く行うようになってきた。

■2024年度の目標・課題

心不全・糖尿病療養指導・禁煙外来・フットケアなど看護外来の充実に力を入れていきたい。さらに外来でのACPにも積極的にかかわりを持つなど新しい分野にも力を入れていきたいと思う。更に光学医療室では新規治療も多くなっているので安全に治療が行えるように看護師のスキル向上に努めたい。

外来B（外科系・救急外来）

主 な 体 制

副看護部長兼看護師長	：	菅家まなみ
副 主 任	：	山本 典子
看 護 師	：	16人
准看護師	：	1人
視能訓練士	：	4人
看護補助者	：	5人

日本学会等認定資格

皮膚・排泄ケア認定看護師	1	松本 厚子
群馬県糖尿病療養指導士	2	飯田 模、松井恵美子

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

外科系外来は救急外来・外科・脳外科・皮膚科・整形外科・泌尿器科・耳鼻科・眼科を備えている。

外科系医師の増員やあらたに常勤医師配置など外科系専門外来が充実受診患者も増加している。そのような中、看護師ではかかりやすい環境と丁寧な患者対応を心掛けてきた。

救急外来では利根沼田の医療を守るため『断らない医療』を実践。救急車搬入人数に関しては2,815人、救急外来受診人数に当たっては8,233人と昨年より上回る人数となった。今年度も利根沼田医療圏で医療が完結できるよう努めていきたい。

■2024年度の目標・課題

救急外来の受診、救急車の搬入件数の増加にともない、安全な医療を提供できるよう看護師のスキル向上に引き続き取り組んでいくとともに、患者の満足度を上げるための取り組みとして接遇に対して力を入れていきたいと思う。

3 A・HCU 病棟

主 な 体 制

看護師長	：	柴崎 芳光
主 任	：	原澤 聖
副 主 任	：	竹内 吟江・茂木めぐみ
看 護 師	：	41人
准看護師	：	1人
看護補助者	：	3人

日本学会等認定資格

日本循環器学会心不全療養指導士	4	星野 卓央・羽鳥 陽子・小林 祐介・新居 沙織
3学会合同呼吸療法認定士	3	柴崎 芳光・原澤 聖・星野 佳祐
日本糖尿病療養指導士	1	高橋 秀徳

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- HCUでは「断らない救急の実践」に向け救急外来から積極的に重症患者の受け入れを行い病床稼働率は95.8%と高稼働を維持することができた。
- 病棟内チーム活動（せん妄対策、在宅支援、抑制ゼロ、心臓リハビリ、RCT）の推進をはかり徐々に活動の成果も見られており今後も継続して取り組みを進める。
- 病棟内での学習会も定期的に開催され職員一同意欲的に取り組むことができた。
- ACPの推進を目標に掲げ心不全患者を中心に12件の「生き方ノート」の聴取を行い、意志決定支援に結び付けた。

■2024年度の課題

- 診療報酬の改定による施設基準と役割の再確認を行い、体制整備を進める。
- HCUでは医療の専門性が高まる中、変化に対応するため看護師の育成をより一層進める必要がある。HCUの基礎知識の評価指標を作成し看護師の知識技術の底上げを図ると共にDPNS（ディパートナーシップナーシング）の導入により職員のレベルアップを進めたい。
- 3 A病棟では心不全療養指導士を中心として循環器疾患に対する療養指導の充実を進める。また循環器緩和ケアチームを立ち上げ増加数する心不全患者の終末期ケアの質の向上を図る。
- 患者を生活者として捉える視点を育成するため看護カンファレンスを充実させる。

4 A病棟

主 な 体 制

看護師長	：	生方真理子
主 任	：	増田 綾
副 主 任	：	星野 朋子
看 護 師	：	29人
准看護師	：	1人
看護助手	：	3人

日本学会等認定資格

群馬県糖尿病療養指導士	1	増田 綾
-------------	---	------

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- 2016年12月より周術期病棟（外科、整形外科、脳神経外科）として稼働。
- 2022年7月より泌尿器科医師常勤化へ。
- 2023年ベッド稼働率は平均96.7%と過去最高を更新している。
- 手術件数（2023年度 入院手術のみ）

診療科	外科	整形外科	脳神経外科	泌尿器科
手術件数2023年度 (2022年度)	382(371)件	390(384)件	15(10)件	150(76)件

- 大腿骨頸部骨折患者153名（2022年度164名）。認知症を合併している場合が多く、抑制患者が増加する要因となっている。
- 抑制に関しては、毎日昼休み後に、抑制カンファレンスの時間を設けたことで、スタッフ全員が抑制患者を把握することができ、さらに外すタイミングも話し合えるようになった。これからも、抑制患者の見極め、抑制に代わるアプローチの仕方、早期に抑制を外すタイミングを図っていきたい。
- 抑制カンファレンスの後にストマ・看護計画をカンファレンスで話し合い、難渋事例の共有や看護計画の修正・終了を行い、継続看護を心がけることができた。

- ストマリハビリテーション講習会 1名受講（計7名）

■2024年度の課題

- 2024年は周術期看護の充実、定期的な勉強会の実施、看護カンファレンスの充実（抑制・ストマ・看護計画・デスカンファレンス）を継続課題として考えている。
- 在宅支援の強化に向けた指導パンフレットの作成、在宅支援チェックリストの活用。
- 一部プライマリー制度の導入。患者を生活者として捉え、入院・外来・在宅と切れ目ない看護を行うための視点を養う。在宅分野と連携して、退院前訪問や退院後訪問も積極的に行っていく。

4 B病棟（地域包括ケア病棟）

主 な 体 制

看護師長	：	星野 晶子
主 任	：	関根美知子
副 主 任	：	笛木佳津江
看 護 師	：	23人
准看護師	：	1人
介護福祉士	：	4人
看護補助者	：	3人

日本学会等認定資格		
認知症認定看護師	1	石原千恵子
摂食・嚥下障害認定看護師	1	根津えり子
日本糖尿病療養指導士	1	星野 晶子
NST 専門療法士	1	森下 光

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- ・リハビリ、看護師や介護福祉士による日常生活動作の再獲得のための生活リハビリなどを提供している。
- ・病棟間異動にて認知症認定看護師と摂食・嚥下障害認定看護師が配置され、専門的な視点から業務改善に繋がり患者サービスの向上に繋がった。
- ・看護師3人夜勤が開始となり、夜勤業務の見直しを行い手順書の作成を行った。
夜間も看護師の体制が厚くなり、質の高い看護サービスの提供が出来ている。当病棟配属の看護補助者が急性期の夜勤を担い急性期病棟の夜勤の質向上に寄与している。

■2024年度の目標・課題

- ・2024年度診療報酬改定による算定要件のクリアをするためのシステムの構築を行う。
- ・直入院の受け入れの拡大が求められ、多様な疾患や病状の患者を受け入れているため、看護職員のスキルの向上が必要となる。定期的な学習会を開催し知識とスキルの向上を図っていく。
- ・身体抑制を最小限にする取り組みをして行く。

5 A病棟

主 な 体 制

師 長	：	川端 由香
主 任	：	柴崎 恵・鹿野亜莉紗
看 護 師	：	27人
准看護師	：	5人
介護福祉士	：	1人
看護補助者	：	3人

日本学会等認定資格

認知症認定看護師	1	鹿野亜莉紗
日本心理学会認定心理士	1	中林八千恵
日本糖尿病療養指導士	2	川端 由香・星野 香織

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

総合診療科・消化器内科・小児科・新生児治療室の混合病棟である。総合診療科では急性期から慢性期まで幅広い患者の受け入れを行ってきた。社会的問題を抱え、退院調整が困難なケースが多かった。医師やソーシャルワーカー、家族や地域の協力を得ながらカンファレンスを開催し、家屋訪問やサービス調整を行い、退院に繋げてきた。

消化器内科では地域で唯一治療ができる医療機関として患者受け入れを積極的に行ってきた。

ERCPは180件の受け入れを行い、前年度より27件増加となった。ESDは前年度から導入し、8件の受け入れを行った。終末期の患者の在宅調整を行うケースも多く、カンファレンスを行い、訪問診療や訪問看護へ繋げるなど、患者・家族に寄り添った看護を心がけてきた。

また、高齢者の入院増加に伴い、認知症やせん妄など一般病棟での管理の難しさを実感した。

小児科は発熱外来を継続して行ってきた。小児二次救急の受け入れを行い、地域で重要な役割を担ってきた。

■2024年度の課題

総合診療科・消化器内科・小児科ともに他院からの紹介を積極的に行っていく。引き続き、ベッドの有効利用を行い、スムーズな入院対応を行っていく。

2024年度は消化器医師2人が増員となり、超音波内視鏡（EUS）・超音波内視鏡下穿刺吸引術（EUS-FNA）が新たに導入となった。患者観察を十分に行い、事故のないよう行っていく。面会制限がある中、感染対策に注意し、患者・家族に寄り添った看護の提供を心がけていきたい。

5 B 病棟

主 な 体 制

師 長 : 小野里千春
主 任 : 南雲 佳奈
副 主 任 : 大竹菜々美

日本学会等認定資格

日本糖尿病療養指導士	2	青木 由香・生方 雅子
3学会合同呼吸療法認定士	1	豊野 寿子

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

呼吸器内科、腎臓内科、内分泌内科、周術期以外の外科科、脳外科の混合病棟である。化学療法室を兼務。5月、COVID-19の5類移行に伴い病床を一部感染病棟としていたが解除。病床数41床運用となり、その後も呼吸器疾患のためCOVID-19肺炎を受け入れている。病床稼働率は91.1%であり外来化学療法室は月平均93.1件、病棟化学療法は283件と増加。糖尿病教室は14件開催し退院へ結びついている。

■2024年度の課題

病棟内チーム活動の推進、学習会開催。
抑制をしない取り組みの実践。

6 A病棟

主 な 体 制

師 長	：	土澤 洋子
主 任	：	牧野真奈美・高橋 裕子
副 主 任	：	石井 友理
助 産 師	：	22人
看 護 師	：	2人
准看護師	：	2人
看護補助者	：	1人

日本学会等認定資格

アドバンス助産師	7	土澤 洋子・牧野真奈美・高橋 裕子・石井 友理・高橋 聡美 角田 明美・忒田 成美
----------	---	--

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

当院は群馬県北部で唯一の分娩施設である。利根沼田地域、吾妻地域を中心に近県在住者や里帰り出産の方にご出産していただいている。外国籍の妊産婦も増加傾向にあり、多国籍豊かな異文化に触れる機会も多く、安心してご出産、育児ができるように日々努力をしている。

地域における助産師の活躍にも力をいれており、小・中学校、高校などで「命」「性」「自己肯定感」などについて伝え共に学び合う機会や、市町村の依頼による産後ケア事業と契約し「宿泊型」「訪問型」を実施し、育児不安や身体的精神的疲労のあるお母様方を支えている。

婦人科も群馬県北部で唯一の手術可能病院である。開腹手術・腹腔鏡下手術・腔式手術などを行っているが、子宮鏡手術も可能となった。

産婦人科病棟のため、眼科・総合診療科・整形外科・外科・泌尿器科・脳神経外科・耳鼻咽喉科と複数の診療科の女性患者の入院も受け入れている。

■2024年度の課題

- 在宅で活躍できる助産師の育成。
- 2年後に少子化対策による分娩料保険適応が検討されている。当院でも整備を進めていく。

6 B病棟（回復期リハビリテーション病棟）

主 な 体 制

師 長 : 倉澤 孝代
主 任 : 西巻 定子
副 主 任 : 萩原とよみ

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

回復期リハビリテーション病棟入院料1に対し、在宅復帰率：84.58%、入院重症患者割合：46.42%、重症患者における退院時FIM16点以上改善率71.86%であった。年間延べ患者数は12045人で一日平均32.9人、平均稼働率：99.7%、平均在院日数62.63日。疾患別割合は、運動器リハビリ：73.7%、脳血管リハビリ：17.8%、廃用症候群リハビリ：8.5%で、年間平紹介患者比率：4.23%であった。

目標であった患者様・ご家族に分かり易い説明が行えるようにするため、ADLやリハビリ状況などが記入できるリハビリ面談シートを作成し活用に至った。またご家族に対し安易な表現を行い、より理解が深められるようにしている。回リハ病棟協会で行った医療安全研修にリハビリ職員を含めた全職員で参加し、後日看護職員でKYT研修を行った。年間の転倒転落の発生は15件あったがレベル3以上になる事例はなかった。認知症や高次脳機能障害の患者様に対し、環境設定やセンサーへの素早い対応で転倒予防に努めている。介助用の浴室の脱衣所に手すりを設置し更衣時の転倒予防にも努めた。レイアウトを変更することで脱衣所の空間が広がり、動きやすくなることで職員の腰痛対策にも対応が出来た。

■2024年度の課題

- 医療機能評価受審に向けた準備を行う。
- 患者様の全体像を捉えた退院支援が行える。
- 患者様の立場に立った対応ができ、安全に入院生活が送れるよう援助できる。
- 知識の向上を図り、安全な看護を提供できる。

手術・中央材料室

主 な 体 制

看護師長 : 塩野 愛惟
主 任 : 渡辺 麻衣
副 主 任 : 千明咲姫恵
看 護 師 : 12人
准看護師 : 1人
看護補助者 : 3人

日本学会等認定資格

第2種滅菌技師	1	宮前 雄一
周術期管理チーム認定制度	1	吉澤 好一
インターベーションエキスパートナース	1	吉澤 好一

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

<手術室>

2023年度の手術件数は1764件（前年比+135）、うち麻酔科症例1007件（前年比+73）であった。科別手術件数は、外科453件（前年比+14）、整形外科499件（前年比+7）、産婦人科206件（前年比-12）、眼科377件（前年比+10）、脳外科20件（前年比+10）、皮膚科68件（前年比+3）と手術件数・麻酔科症例とも増加した。

当院は利根沼田地域で「断らない救急」のスローガンの下に昼夜問わず緊急手術にも対応している。また群馬県北部で唯一の分娩・手術施設として地域の役割を理解し、定期的な学習会や学会参加、訓練を行い個々のスキルアップを行った。

当院では安心して手術が受けられるよう外来・入院センター・病棟と連携し、パンフレットを用いて統一した説明を行い、手術室では術前・術後訪問を行い患者の不安を軽減できるよう心掛けている。

<中央材料室>

病院、利根保健生協の事業所全体の洗浄滅菌を請けおい、安全で安心できる医療機器の提供に努めている。スタッフ個々もスキルアップのため群馬県中

材業務研究会へ参加。医療現場における滅菌保証のガイドラインを参考に実施している。

1日あたりの洗浄機の運行回数

洗浄機2台 8.5回/日

1日あたりの滅菌器の運行回数

高圧蒸気滅菌器2台 4回/日

プラズマ滅菌機1台 3回/日

■2024年度の課題

<手術室>

手術室看護師の役割は周術期における患者の安全を守り、手術が円滑に遂行できるように専門的知識と技術を提供することにある。2024年の課題は、ラダーの活用、事例の振り返り、OJTの充実をはかる。また、心理的安全性が保たれた職場で医療安全の強化と、感染対策の統一認識、術前外来での手術室看護師の説明に取り組みたい。

<中央材料室>

滅菌技師の資格取得をめざし学習し、より安全で質の高い器材の提供を目指す。

透析室

主 な 体 制

師 長	:	阿部 冴子
副 主 任	:	香川 文枝
看 護 師	:	9人
准看護師	:	2人

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

シャントカルテを作成しシャント異常の早期発見につなげることや、穿刺スキルの向上に務めることが出来た。今年度のDSA総数：36件 PTA総数：67件

フレイル予防の運動は用紙を用いて運動回数を記入しその用紙を共有することで、患者のモチベーションを上げ継続的に出来るように工夫した。またADLが下がった患者には家族面談し、介護保険の申請を行い通院リハやデイの利用を促し通院できる体制を整えた。そして、足回診では気になる患者の情報を共有し、足浴や爪切りを透析前に行い足病変の改善につなげることが出来た。

今年度から透析導入パスを作成し、当該病棟と連携して統一した患者教育が行えている。透析導入患者は22人と増加し、当院維持透析患者は満床を継続している。

■2024年度の課題

- 月1回の学習会の開催を目標とし、学習係を中心として看護の向上に努める。
- 透析導入パスを用いて、病棟と統一した患者教育を行っていく。
- 患者の生活の変化を情報共有し、介護申請や家族教育などを行っていく。
- 足回診を1回／月行っており、異常発見時は皮膚科受診へつなげていく。

検査室

主 な 体 制

技 師 長 : 関根美智子
主 任 : 林 美奈
副 主 任 : 稲垣 圭子
深代やす子
宇敷 明人
検査技師 : 21人
看 護 師 : 4人

日本学会等認定資格

細胞検査士	4	稲垣 圭子・深代やす子・森川 容子・真下 祐一
日臨技認定病理検査技師	2	深代やす子・森川 容子
超音波検査士	2	林 美奈・高木ゆかり
日本糖尿病療養指導士	1	宇敷 明人・齋藤 奏太
NST 専門療法士	2	関根美智子・荻野 亮子
日本 DMAT 隊員	1	荻野 亮子

活 動 報 告

■2023年のまとめ

新型コロナウイルスのPCR検査について件数は減ってきている。新たな取り組みとしてPCR検査機器を活用し、百日咳の遺伝子検査を検討、今後はナウンスをして件数を増やしていきたい。

循環器の検査では、CPXの検査数増加や負荷心エコーを開始した。現状では医師と協力して検査を実施している。

多職種との連携では、荻野がDMATで石川に出勤した。今後も職場の理解と協力を得て協力していきたい。

精度管理については以下に示す成績であった。

- ・日本臨床衛生検査技師会 98.4点
- ・日本医師会 96.7点
- ・群馬県臨床検査精度管理 98.7点

■2023年度診療実績

項 目	件 数	前年度比(%)
尿・一般検査	209,635	101.8
血液検査	319,687	102.3
生化学検査	922,748	102.5
細菌検査	19,968	62.9
生理検査	19,605	106.9
病理検査	4,718	103.5
外部委託	37,848	100.6

■2024年度の課題

- *業務拡大…遺伝子検査装置での新たな検査項目導入開始。循環器科の検査件数増加に向け、超音波検査や心肺運動負荷検査ができる技師の育成。
- *チーム医療への参加…心不全早期発見プロジェクト、感染防止対策チーム（ICT）、抗菌薬適正使用支援チーム（AST）、糖尿病教室、心臓リハビリチームへの参加はもちろんの事、患者様に対しての結果説明の実施など、検査技師ならではの役割を果たす。

- * 研修医への指導…研修プログラムに沿って研修医への研修を充実させる。
- * 研究発表への取り組み…日常業務で取り組んできた内容をまとめ、研究発表につなげていく。
- * 経営改善に向けて…負荷心エコーへの協力や心肺負荷試験（CPX）の件数を増やし、経営改善に取り組む。
- * 職場づくり…ハラスメントがなく、安心して意見が言える職場づくりを目指す。

放射線室

主 な 体 制

放射線科 読影医	：	山田 宏明
技 師 長	：	本多 拓晶
主 任	：	中村 文彦
副 主 任	：	大竹 毅
診療放射線技師	：	10人

日本学会等認定資格

日本医学放射線学会放射線診断専門医	1	山田 宏明
健診マンモグラフィー撮影技術認定	2	栗原 真実・井上 美華
放射線管理士	1	本多 拓晶
ICLS インストラクター	1	大竹 毅
日本 DMAT 隊員	1	大竹 毅
放射線機器管理士	1	本多 拓晶
医療画像情報精度管理士	1	本多 拓晶

活 動 報 告

■2023年度診療実績

項 目	件 数	前年比
一般撮影	34,139	104%
CT検査	10,532	105%
MRI検査	3,172	101%
健診関連	8,327	101%
総検査数	52,861	104%

■放射線科診断部門読影件数

	件数	前年比
CT検査	8,692	105%
MRI検査	2,465	105%

■2023年度のまとめ

新入職員2名入職し研修を行った。

放射線科医師の指示のもと、CTやMRIの撮影を行っている。マンモグラフィー担当は全て女性が対応している。ERCP、CT、血管撮影が増加傾向である。

能登半島地震の際にDMAT隊員として職員を派遣した。

■2024年の課題

進化する放射線診断技術を学習してチーム医療に貢献する。人材育成を中心課題とし、当直対応や業務をさらに発展させる。

栄養管理室

主 な 体 制

室 長	：	林 和代（管理栄養士）
管理栄養士	：	9人
栄 養 士	：	6人
調 理 師	：	6人
調 理 員	：	5人
事 務 員	：	1人

日本学会等認定資格

栄養サポートチーム専門療法士	2	林 和代・諸田 梢
日本糖尿病療養指導士	7	林 和代・諸田 梢・櫻井 万幾・ 杉木 裕子・石坂 薫・千吉良萌美・ 信澤 妙佳
人間ドック健診情報管理指導士	1	林 和代
栄養経営士	1	林 和代

活 動 報 告

■2023年のまとめ

- 嚥下食改善チームでは、ムース食に野菜の型を導入、クオリティーアップに繋がり、患者からも喜ばれた。
- 検査用の「寝たまま食（串さし食）」の提供を開始した。
- 地域医療活動では、難病相談会「潰瘍性大腸炎・クローン病の食事療法」、子育て応援企画「離乳食について」、にっこり教室「食中毒について」の講師を担当し、様々な年代の方々と交流が持てた。
- 利根沼田食支援の会に参加し、食事形態分類表を作成した。
- 日本臨床栄養代謝学会で要望演題、全日本民医連栄養部門代表者会議で指定報告を発表した。

項 目	件 数	月平均	前年比
外来栄養指導	2,006	167	78%
入院栄養指導	1,029	86	69%
集団栄養指導	34	3	72%
糖尿病透析予防指導	334	28	130%
栄養サポートチーム加算	2,335	195	113%
早期栄養介入管理加算Ⅰ	230	19	223%
早期栄養介入管理加算Ⅱ	2,546	212	130%

■2024年の課題

学会での演題発表に取り組む。

入院基本料の施設基準における栄養管理（GLIM基準の栄養評価）を充実させる。

【学会発表】

日本臨床栄養代謝学会 管理栄養士 千吉良萌美
「当院における早期栄養介入管理加算の取り組みについて」

リハビリテーション室

主 な 体 制

技 士 長 : 諸田 顕 (理学療法士)
 主 任 : 石井 亮 (理学療法士)
 平沢 千尋 (理学療法士)
 浦川 美栄 (作業療法士)
 原澤 陽二 (言語聴覚士)
 志賀 達也 (理学療法士)
 副 主 任 : 勝見佐知子 (歯科衛生士)
 岩東 裕之 (作業療法士)
 茂木 崇 (理学療法士)
 清水 雅仁 (作業療法士)

理学療法士 : 37人
 作業療法士 : 15人
 言語聴覚士 : 4人
 歯科衛生士 : 1人

日本学会等認定資格		
新潟大学博士課程修了	1	原澤 陽二 (言語聴覚士)
群馬大学修士課程修了	1	篠崎 典恵 (理学療法士)
茨城県立医療大学修士課程修了	1	茂木 崇 (理学療法士)
医科歯科連携・口腔機能管理 認定歯科衛生士	1	勝見佐知子 (歯科衛生士)
糖尿病予防指導 認定歯科衛生士	1	勝見佐知子 (歯科衛生士)
NST 専門療法士	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士)・ 七五三木史拓 (理学療法士)
認定訪問療法士	1	木暮 拓美 (作業療法士)
運動器認定理学療法士	1	茂木 成介 (理学療法士)
心臓リハビリテーション指導士	4	狩野進之助・増田 睦・志賀 達也・平井優香 (理学療法士)
3学会合同呼吸療法認定士	6	諸田 顕・志賀 達也・篠崎 典恵・高山 翔平・ 西山 早希 (理学療法士)・井野 巧 (作業療法士)
認知症ケア専門士	2	増田 睦 (理学療法士)・浦川 美栄 (作業療法士)
群馬県糖尿病療養指導士	3	志賀 達也・七五三木史拓 (理学療法士)・ 勝見佐知子 (歯科衛生士)
がんリハビリテーション研修修了	19	志賀 達也・平沢 千尋・宮崎真梨子・狩野進之助・ 増田 睦・七五三木史拓・茂木 崇・高山 翔平・ 西山 龍昌 (理学療法士)・浦川 美栄・坂牧 愛美・ 清水 雅仁・本間 香織・小林千恵子・井野 巧・ 岩東 裕之 (作業療法士)・原澤 陽二・林 茂宏・ 大塚 春樹 (言語聴覚士)
介護予防推進リーダー	7	七五三木史拓・平沢 千尋・諸田 顕・狩野進之助・ 坂牧 亮・石井 亮・増田 睦 (理学療法士)
地域ケア会議推進リーダー	7	七五三木史拓・平沢 千尋・諸田 顕・狩野進之助・ 坂牧 亮・石井 亮・増田 睦 (理学療法士)
フレイル対策推進マネジャー	4	狩野進之助・諸田 顕・七五三木史拓・ 坂牧 亮 (理学療法士)
健康運動指導士	1	宮田 恵章 (理学療法士)
生活行為向上マネジメント	1	岩東 裕之 (作業療法士)
ST 介護予防推進コース	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士)
ST 地域包括ケア推進コース	2	原澤 陽二・林 茂宏 (言語聴覚士)

活動報告

■2023年のまとめ

新総合事業における地域への参加は67回延べ76人の職員を派遣した。地域包括ケアシステム構築に向けて自治体や他事業所との連携が進展している。

切れ目ないサービスを目標に一般病棟の日曜対応の継続と祝日体制を実施した。

■2024年の課題

事業の質の強化及び一般病棟の切れ目ないサービスを目標にスタッフを確保する。

地域での介護予防の推進・全病棟でのがんリハビリテーションの提供・心臓リハビリテーションの対応強化及びリスク軽減・呼吸器疾患の入院対応やCOPDの外来対応の強化・糖尿病患者の教育の推進・栄養と運動の視点での対応・認知症患者の対応の質の強化・ドライブシミュレーターの運用の推進。

サービスの質の向上のため学会等認定資格取得者の増加。

職場人数が増加しており、教育体制の充実が必要。

疾患別リハビリテーション料等	2022年度	2023年度	前年比
がんリハビリテーション料	2,416単位	3,003単位	124%
脳血管リハビリテーション料Ⅰ	30,178単位	27,972単位	93%
廃用リハビリテーション料Ⅰ	29,652単位	31,296単位	106%
運動器リハビリテーション料Ⅰ	85,644単位	88,287単位	103%
呼吸器リハビリテーション料Ⅰ	12,996単位	14,851単位	114%
心臓リハビリテーション料Ⅰ	11,524単位	13,532単位	117%
摂食機能療法	5,918件	7,008件	118%
合計	178,328単位	185,949単位	104%

臨床工学室

主 な 体 制

技 士 長 : 林 貴幸
主 任 : 福田 浩嗣
臨床工学技士 : 7人

日本学会等認定資格

透析療法合同専門委員会 透析技術認定士	1	福田 浩嗣
日本心血管インターベンション治療学会 心血管インターベンション技師	2	福田 浩嗣・外川 拓実
ME 技術教育委員会 第2種ME 技術実力検定	4	林 貴幸・福田 浩嗣・佐渡 拓斗・竹部 悠希
3学会合同呼吸療法認定士認定委員会 3学会合同呼吸療法認定士	3	福田 浩嗣・外川 拓実・佐渡 拓斗

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- ・医療安全向上のため医療機器研修会の開催や各種委員会に参加し、活動を継続している。
- ・新人看護師・初期研修医に医療機器・医療安全の研修会を継続している。
- ・医療機器安全ラウンドを行い病棟での医療安全に貢献している。
- ・医療機器の日常点検、定期点検を行い安心安全な医療を提供出来るように活動している。
- ・接遇と医療安全向上のため、朝礼時に勤務者全員で標語の唱和を継続している。
- ・超純水透析液基準を継続し、質の高い透析医療提供に貢献している。
- ・各科インターベンションの際に医師の負担軽減のため、助手として術野に入った。
- ・手術室業務を拡張し手術室スタッフの点検業務の負担軽減に貢献した。
- ・タスクシフトに向けて研修計画を立案している。
- ・学生実習受け入れのため実習施設認定を受けた。

■2023年度診療実績

	件数	前年度比
医療機器終了時点検及び、定期点検件数	4,861件	108.3%
血液透析件数	12,208件	104%
HCU血液浄化件数	114件	148%
HCU CRRT件数	7件	78%
腹水濃縮処理件数	22件	224%
血液吸着式血液浄化件数	38件	172%
心臓カテーテル検査及び治療総件数	155件	109.6%
ペースメーカー外来件数	154件	94%
遠隔モニタリング	571件	133%

■2024年度の課題

- ・新人看護師・初期研修医の医療機器、医療安全研修内容を定期的に見直し、最新の情報を提供できるようにする。
- ・中途採用者向けの医療機器研修を企画し統一した手技を整えていく。
- ・医療機器の日常点検・定期点検を行い、安心安全な医療提供が出来るようにする。
- ・医師の働き方改革に基づき臨床工学技士に求められる業務拡張に対応するため各種研修に参加し知識・技術の習得に努め、タスクシフトを計画する。
- ・医療機器の計画的な新規導入・更新を立案、長期運用計画を作成して運営に貢献する。

薬剤部

主 な 体 制

部 長 : 大竹美恵子
主 任 : 宮内 智行
薬 剤 師 : 16人・助手2人

日本学会等認定資格

日本病院薬剤師会 妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師	1	
日本緩和医療薬学会 緩和薬物療法認定薬剤師	1	
日本糖尿病療法指導士	1	
JSPEN 栄養サポートチーム専門療法士	1	
日本アンチ・ドーピング機構 スポーツファーマシスト	2	
薬学教育協議会 認定実務実習指導薬剤師	3	
日本病院薬剤師会 日病薬病院薬学認定薬剤師	1	
日本薬剤師研修センター 研修認定薬剤師	5	

活 動 報 告

■2023年のまとめ

項 目	件 数	前年度比
薬剤管理指導料1	3,451件	121.4%
薬剤管理指導料2	4,235件	114.5%
病棟薬剤業務実施加算1	10,745件	103.9%
病棟薬剤業務実施加算2	4,185件	104.1%
退院時指導	132件	121.1%
麻薬管理指導	244件	144.4%
無菌調製件数（抗がん剤）	2,463件	92.8%
無菌調製件数	285件	119.7%

2023年4月に新卒薬剤師2人、2024年3月に2022年卒薬剤師1人が入職した。新人教育は前年度の反省点を改善しながら対応し、2年目からの病棟業務研修に繋げることができた。

2022年組が自身の経験を活かした導入時研修の指導を2023年組にすることができたので、きめ細かい研修ができたことは今後に繋げていきたい研修制度である。

また、2022年組も病棟業務研修も積極的に参加し基礎力を向上することができたうえ、薬剤管理指

導業務件数も前年度より大幅に増やし経営に貢献することができた。

薬学生実務実習は2人受け入れた。

■2024年の課題

2024年3月に入職した2022年卒薬剤師および2023年組の病棟業務研修が一番の課題であるが、今後の体制作りのためにも前年度の経験をもとに対応していきたい。現在運用している教育ラダーも見直し、バージョンアップする予定である。新教育ラダーには認定薬剤師取得も盛り込み新規取得者を増やしていきたい。

また、法人内の介護老人保健施設への対応依頼もあるため、情報共有方法、投薬方法も見直し業務の効率化を検討し対応していきたい。

医薬品の出荷制限は改善する見込みが全くない状況であるが、患者の命を守るため尽力していきたい。

病院事務局

主 な 体 制

事 務 長 : 五十嵐 きよみ
副事務長 : 小林 淳一
事務次長 : 高井 一茂
: 井本 光洋

学会等認定資格

診療情報管理士	1	高井 一茂
---------	---	-------

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

2020年から新型コロナウイルス感染症への対応に奮闘を続けてきたが、今年大きな転換期を迎え、通常の医療活動へ変化を遂げた1年であった。

3月に群馬県から新型コロナ5類移行ロードマップが発出され、当院版ロードマップを作成して新たな診療体制を構築した。5月にコロナ病棟の仮設壁を撤去し、9月にはコロナ病棟を閉鎖して各病棟でコロナ患者を受け入れた。10月には3年半毎週開催してきたコロナ感染症対策会議を解散した。コロナワクチン接種は年度末まで特別接種体制を維持した。今後の新興感染症への対応として、群馬県と第一種協定指定医療機関、第二種協定指定医療機関の協定を締結した。

一方、コロナ5類移行後にコロナ加算および病床確保料が大幅に減額となるため、経営対策へ舵を切ることとなった。新たな患者確保対策として、負荷心エコー・手関節鏡・EUSを新規に導入した。各職場に経営改善と経費削減への協力を求め、患者確保や光熱費削減に取り組み、補助金申請も積極的に行い、年度末には黒字を確保することができた。2024年度診療報酬改定は賃上げ対応に苦戦したが、各部門では新規要件対策や新規加算取得に向

けて対応した。

次年度の診療体制については呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、外科、産婦人科の医師が増員となり、長年の念願が叶い精神科常勤医師が内定した。麻酔科常勤医師が不在となるが大学医局からの派遣により麻酔科体制は維持されることとなった。医師の働き方改革への対応としては、プロジェクトを立ち上げ医師の労務管理の準備に取り組んだ。

働きやすい病院を目指してハラスメント対策やメンタルヘルス支援対策に取り組み、職員コミュニケーションの活性化を図る「ありがとうのお届け便」を継続した。コロナ禍で低迷した地域住民との交流を再始動させるため、医療懇談会の開催や、地元高校による慰問演奏会、バイクチャリティーパレードなどを受け入れた。2年目の活動となる似顔絵セラピーでは高校生や生協組合員とのコラボ企画を開催した。

■2024年度の課題

1. 病院経営にすべての職場が参画し、職員一丸となって黒字化に取り組む。
2. 地域の医療要求に応え、医療体制を継続するために必要な人材確保と次世代育成を進める。

3. 選ばれる病院として接遇改善の強化とかかりやすい外来の改善に取り組む。

患者、組合員の声に耳を傾けられる人材を育成する。

4. 働きやすい職場づくりの推進としてメンタルヘルス対策、ハラスメント防止に取り組み、心理的安全性の高い職場を目指す。

5. 日常業務を俯瞰する視点で再点検し、医療機能評価の更新に向けて準備する。

以上5つの病院方針を掲げ、具体的な目標を設定して病院全体で取り組む1年とする。

新事務長を迎え新たな病院事務局体制の基盤を構築し、病院の管理運営の継続に尽力する。

医局事務課

主 な 体 制

課 長 : 丸山 和希
副 主 任 : 片山 裕美
職 員 数 : 14人 (うち医師アシスト9人)

学会等認定資格

卒後臨床研修評価機構サーベイヤー	1	丸山 和希
------------------	---	-------

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

• 医師の確保

初期研修医6人、専攻医1人（総合診療科：1）、スタッフ3人（総合診療科：1、脳神経外科：1、産婦人科：1）の常勤医増員となった。外部プログラムから延べ5名の専攻医を受け入れ、総勢72人の医局体制となった。

• 高校生、医学生への対応

高校生医師体験や医学部入試対策の模擬面接講座を開催し、医学部進学を目指す学生への支援を行った。医学生の見学・実習では1年生から6年生までで延べ64件の受け入れを行った。また国際情勢により自大学での臨床実習が困難となった海外医学部生の受け入れも行った。

地域医療に関心のある医療系学生団体『ちいっこ〜地域と医療のすべてがここにある〜』からの打診を受け、片品村役場、尾瀬高校、かたしな高原スキー場、地元農家の方の協力を得ながらフィールドワークを実施した。

• 医師の働き方改革への対応

医師の働き方改革施行に向け、毎月の医局会議にて制度の解説を行い、制度に適合した勤怠管理を行うため、googleスプレッドシートを活用したクラウド管理型の勤務表を導入した。

■2024年度の課題

〈医師確保〉

リクルートサイトやSNSでの情報発信により力を入れ、初期研修医や専攻医をはじめとした常勤医師確保につなげる。また学会やセミナー等の機会を利用し、臨床研修・専門研修に携わる事務のスキルアップと制度の理解を深める。

〈医師アシスト係〉

常勤医師を対象としたドクターアシスタントに求める役割・業務内容についてのアンケート結果から、更なる医師の負担軽減や業務の効率化につなげていく。



▲ 利根保健生協
リクルートサイト



▲ 利根中央病院
初期・後期研修情報



▲ 総合診療科
facebookページ



▲ 研修センター
facebookページ



▲ 研修センター
X (旧Twitter)



▲ 研修センター
Instagram

総務課

主 な 体 制

課 長 : 林 俊彦
主 任 : 武井みゆき
主 任 : 高橋 陽介
職員数 : 16人

日本学会等認定資格

医療情報技師	2	高橋 陽介・大野 秀彰
--------	---	-------------

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

総務課は、医療材料管理、勤怠管理、設備管理、庶務業務、電話交換、リネン業務を行う総務係と、システム管理を行うシステム係で業務を行っている。

設備の維持管理は例年通り、関連業者と連携して管理を行ったが、大きな問題はなかった。医療材料に関しては昨年に引き続き価格高騰が続いており、SPD業者と連携して商品の切り替えなどで経費の圧縮を図った。医療機器購入に関しては高額機器の値引き交渉を行っているが、その分決裁に至るまでに時間を要しているのが現状である。勤怠管理では、勤務予定実績の入力及び入院基本料様式9表作成のため、担当者を半日看護部に配置し、看護師長の業務負担軽減に取り組んできた。また、各委託業者は滞りなく運用ができていたと考えている。

システム係は新人2人を受け入れた。業務を理解し、役割を果たすべく、教育と指導を継続している。システムに関する大きな事故はなかった。ランサムウェアなどの脅威に備えるため現行のネットワークセキュリティに関する調査を実施し、更なるバックアップ体制の構築を行った。

■2024年度の課題

働き方改革への対応も含め勤怠管理の推進と総務課の業務効率改善を目指す。昨年度に引き続き医療材料・光熱費など価格高騰に対して経費削減などの取り組みを重点的に行うと同時に、経営に必要な精査された情報を報告できる仕組みを作っていく。また、資材担当者2名がほぼ同時に入れ替わることとなった。従来通りの業務遂行ができるよう総務課全体でフォローが必要になる。

設備管理業務に関しては、新病院に移転し9年が経過したことから、建物、設備などの再点検など行う計画である。

システム関連では情報共有ツールを使った運用の推進を図りつつ、職員への情報セキュリティの周知を図っていききたい。

外来サービス課

主 な 体 制

課 長 : 綿貫 敦史
主 任 : 有坂 典子
副 主 任 : 高橋愛由美
職 員 数 : 19人

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- 2023年4月は新入職員を1人迎えた。
毎年恒例の人事異動、入退職が多くあった。教育の場として、新たに配属された事務職員教育に努めた。配属2年目以降の若手事務職員も自立し、総合的な能力向上もあった。
具体的には、タスクシェアリングを推進し、残業の偏りを防いだ。一つの業務に対する属人化を防ぐことによって、年休取得の推進を実施した。
- 感染症に対する対応として、発熱外来の事務配置、詳細な入館管理の実施等、新型コロナウイルス感染対策業務は実施継続された。小児患者の発熱者対応として、小児科外来へ午前中の事務員配置も実施継続した。
- 新型コロナウイルスの臨時的な対応も年度末で終了し、新型コロナウイルスの流行による患者数増加やそれに伴う保険請求業務の煩雑化、診療費の患者自己負担分請求業務も落ち着いた状況が継続している。2023年度は職場内学習、課題解決などすりあわせ、各個人のレベルの維持・スキルアップを目標とした年だった。
- 利根保健生活協同組合の更なる発展、成長を常に念頭に置き、時代の変化とともに次年に繋がる取り組みを提案、実行した1年だった。

■2024年度の課題

- 人員の定着が課題
2024年度に引き続き、業務水準の維持、向上を目指す1年となる。
与えられた状況の中で、法人全体の効率化を意識しながら、業務の精度維持・向上が大きな課題となる。職員の出入が多く、職員が固定化されないため、質の維持を第一目標とする。保険請求に対し返戻・減点を減らし、また算定漏れのない正確な保険請求を追求する。引き続き職場内学習に意欲的に取り組み、診療報酬に対する知識を深め、他職種との連携をとり情報共有をしていきたい。今年度も利根沼田地域で利根中央病院果たす役割を意識しながら、課題の克服に取り組みたい。

入院サービス課

主 な 体 制

課 長 : 西村 樹
副 主 任 : 糸賀 諒輔

日本学会等認定資格

診療情報管理士	7	西村 樹・森田 由美・牧野 昌広・西山 未来・稲垣 秀行・ 柴原 結奈・小菅茉那歩
---------	---	--

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

- COVID-19特例が徐々に廃止されていくなかで、単価が大きく減少しないよう、取りこぼし予防や加算算定増に向けての取り組みを継続した。
- がん登録、NCD（外科・循環器）、JND（脳外科）は100%登録を継続することができた。
- 退院後14日以内サマリー作成率90%以上を維持することができた。
- 病棟業務担当者・診療情報管理係担当者の異動・変更があったが、期間が短く、十分な形での引き継ぎができず、課題を残した。
- コロナの5類移行もあり、地域活動が徐々に再開され、コロナ後入職の職員が積極的に参加し、生活協同組合活動への理解を深められた。

■2024年度の課題

- 令和6年度診療報酬改定に早期に対応できるよう、新設項目など学習をすすめていく。
- 急性期一般入院料1の看護必要度基準を維持できるように、取りこぼしのない会計入力を追求していく。
- 病棟配置事務職員の立場を生かして情報提供を行うと共に、チーム医療の中継点として機能できる存在を目指す。
- 医療機能評価を控え、前回指摘事項の診療録の質的監査方法を確認していく。
- 子育て中の職員もおり、育児や家庭と両立しながら働けるよう職場環境を整える。
- 新入職職員、中堅職員、ベテラン職員がそれぞれ成長し職場の底上げをする。

総合支援センター

主 な 体 制

室 長	：	原 田 孝
副看護部長兼看護師長	：	宮 本 笑子（看護師）
事務課長	：	河 邊 有紀（事務）
主 任	：	荻 野 秀樹（社会福祉士・精神保健福祉士・公認心理師）
副 主 任	：	鈴 木 真紀子（看護師）
職 員 数	：	16人（うち看護師5人・准看護師1人・社会福祉士7人・事務員3人）

学会等認定資格

緩和ケア認定看護師	1	鈴木真紀子
公認心理師	1	荻野 秀樹
3学会合同呼吸療法士	1	宮本 笑子
キャリアコンサルタント	1	小野 節子
衛生工学衛生管理者	1	小野 節子
第1種衛生管理者	1	小野 節子
介護福祉士	1	武井 律子
社会福祉士	7	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・萩原めぐみ・室田 翔斗・水越 結衣・小野 節子
精神保健福祉士	4	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・萩原めぐみ
介護支援専門員	4	荻野 秀樹・武井 律子・金井 智弥・小野 節子

活 動 報 告

■2023年度のまとめ

・地域連携部門

コロナが収束を迎え、利根沼田地域登録医へ訪問営業（2月23件、3月17件）を開始した。沼田利根医師会症例検討会は当院を会場として2回（6／13、11／28）、院外医師も含めそれぞれ31名、30名の参加、2演題での開催であった。当院主催

によるオープンCPCは1回（3／18）開催し、31名の参加であった。また、第10回沼田利根医師会・利根中央病院情報交換会は4年ぶりに無事開催され、医師会医師19名、利根中央病院医師41名、管理部及び看護部13名、受付及び司会9名計82名の参加となった。医師への返書作成依頼を計画的に行い、2月には返書率100%を達成した。紹介率は前

年度月平均14.7%から18.8%、逆紹介月平均は昨年度17.7%から22.7%と着実に上昇している。問題点はその都度スタッフ間で情報共有に努め、よりよい地域連携に繋げた。

・相談支援部門

職員の体制に変更なし。相談件数は9,295件（前年度9,418件）、退院支援加算の算定数も前年とほぼ変わらない件数となった。

精神保健福祉士資格試験に2名が合格した。

・入院センター部門

3名配置。入院前からの患者支援を実施することで、円滑な入院医療の提供や病棟業務負担の軽減等に取り組んでいる。安心して療養生活が送れるよう、入院前から支援させていただくことを患者・家族に説明し、療養支援計画書を立案、受け入れ病棟職員、社会福祉士、退院調整看護師と情報共有をしている。また、薬剤の確認にあたっては、薬剤師と連携を図っている。入退前支援加算106件前年比（112%）コロナ禍、入院される患者の事前の体調管理の協力が必須であり、書類や説明内容の工夫に取り組んだ。

・総合支援センター内の連携でベッドコントロールの情報を元に退院調整に協力した。

■2024年度の課題

・地域連携部門

紹介された患者について紹介元の期待に応えられるよう対応し、しっかりとお返事を返すという基本を徹底していくこと、また地域の先生方の声を聴いて改善に努める姿勢を見せることで他医療機関からの信頼を深めることに繋がるという認識を踏まえて業務を進める。中之条方面の新規登録医獲得を目指し、訪問・営業活動を行う。

沼田利根医師会・利根中央病院情報交換会の開催。

・相談支援部門

加算の算定を漏れなく取れるよう仕組みを継続して見直していく。

職能団体の研修への参加や資格取得など個々のスキルアップを図っていく。

マニュアルの見直しや整備を行い業務の効率化を図っていく。

・入院センター部門

入院前からの支援、退院後を見すえた一貫した支援を行いつつ、院内の入院センターとしての役割を更新する。入院案内の動画を作成する。

項 目	2022年度	2023年度	前年度比
退院支援加算（700点）	1,474件	1,438件	98%
介護支援連携指導料（400点）	45件	61件	136%